

俳句の本

創刊號



志江

第一卷第一號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和十九年六月一日(每月一日)發行

昭和十九年五月二十五日印刷納本

俳句日本 第一卷第一號

俳句日本道創作	荻原井泉水 (一)
「俳句日本」への希望	中塚一碧樓 (三)
我等の新出發と指導精神	西垣正禪子 (四)
海紅句錄	中塚一碧樓選 (七)
陸集	西垣正禪子選 (六)
層雲壇	荻原井泉水選 (五)
句席	(三)
句評	(元)
各家近什	(四)
一角より	荻原井泉水 (五)
句輯	(四)
みいくさ集

俳句 日本 道 創作

荻原井泉水

祖國日本を愛する心をもつて俳句を愛する者

新しき日本の道を開くが如くに俳句を創作する者

かうした氣持の者の機關誌として、こゝに「俳句日本」が生れたと、私は考へたいのである。

日本の美しさ、日本の清らかさを説く人は多い。然し、其美しさ清らかさを通して日本の生命にまで滲透し、その生命を日本の言葉の魂を以て表現するものこそ、俳句の中の内在律俳句ではないか。かつて日本が封建太平の世を樂しんでゐた時に、俳句は約束定型の形の中に憩うてゐた。日本が島嶼的の圍ひを除いて、世界的に進出した時に、俳句としての舊い殻を破つて新しい光の中にをどり出た、それが内在律俳句ではないか。いま、日本は逞しく厳しく戦つてゐる。俳句も亦、逞しく厳しく進みつゝある。俳句の作者が前線に於て戦つてゐるところでは、俳句も亦硝煙の中に息づいてゐるのだ。銃後の生活が戦争の他にはないのだから、我々の俳句とても亦、此戦を勝ちぬく爲に緊張してゐる我々の呼吸に外ならないのである。

我々の俳句は日本と共にある

我々の俳句は日本と共に新生する

「俳句日本」といふ言葉は、單に雜誌の名ではなくて、我々俳句作者の標語であると考へたいのである。

x

俳句作者にとつて、その俳句は生活である、又信念である、又、求道の言葉でもある。だから、俳句は必ずしも伴侶を要しない、獨り居て獨り作ればよろしい。だが、獨り合點はいけない。自分の印象、自分の感想だけにとどまるものは、自分の日記に書いておけば足りる。之を活字にして他に讀ませようといふのは、蟲が好すぎる。俳句は「記録」ではない、「創作」である。「創作」とは主觀の客觀化である。己れより出でて己れを越えたる一つの境を作ることである。此の「境」を作りえないもの、即ち主觀の主觀にとどまるものは、之を文字に書いても活字にしても、正しくは「作品」とは云ひ得ない。——何と斯様な「作品？」の多いことか——で、俳句作者は其の書いたところのものを自ら嚴密に検討し、若しくは他の批判を乞うて、眞に作品たるに値するや否やを識別しなければならぬ。

我々は常に絶えず作るといふことを怠るまいとする。これは單に、作品を大量多産するといふ意味ではない。作ることに依つて境を開き、境を開くことに依つて己れを高めようとする意圖ゆゑである。されば「作る」ことは錬行である。さうして、斯様な錬行に依つて精進することを我々は「俳句の道」と稱してゐる。俳句は單に文學すること

はなく、これを一つの「道」として行持するところに、その精神的の意義がある。芭蕉の時代にあつて、俳句は既に「道」として確立してゐた。その後、俳句といふものが遊戯文學化し、今日の定型俳句はこれを所謂健全娛樂にまで發展せしめたのであるが、我々の内在律俳句は、さうしたところに低迷してはゐられないのである。

×

「わけのぼる麓の道はことなれど共に高嶺の月を見るかな」といふ道歌がある。これも一つの眞理かも知れない。だが、それは概念としての談である。道をのぼりつゝある者にとつては、現に歩みつゝある道が唯一の道なのである。あちらの道がらくさうだと迷つたり、向うの道が近くはないかと案じたりするのは、自分の道に疲れてゐる證據であつて、さうした人は遂に目的を達することは出来まい。

「道」を道として進むものは、たゞ六根清淨の心がけあるのみである。そこに、同じ道を進む者の親しみがある、はげみ、合ひがある。扶け合ひがある。道友としての愛がある。かういふ氣持は、我々の俳句の道に於て殊に顯著に感じられる。勿論、定型俳句の間にも、同じサークルの間の親愛と云ふものはあらう。だが、それは同じ「趣味」をもつて集つてゐる同趣味者の仲といふか、或は同じ雑誌をもつて連る同じ「派」の親しさといふものである。所謂「派」といふ觀念と、我々が「道」といふところのものは、似てゐるやうであるが、其本質に於ては違つてゐる。然らば何處が違ふか——「派」といふものは感情から

色づけられる。「道」といふものは意志の上に立つ。好きだ、嫌ひだと云つて他を排する心は感情である。己れの向ふところにひたむきとなる心は意志である。勿論、俳句の如き人間の感情を主とするものが、凡て感情的に動かされることは當然でもあらうが、私は此の「派」——黨派的感情といふことは「道」の爲に好ましからぬことと思ふ。で、我々の間にも、とかく感情的に、他を視、他に聞き、他を嗅ぎ、他をそしり、他を憎み、他を陥れようとする、さうした黨派的の眼、耳、鼻、舌、身、意の蠢動することを戒めたい。道を道として進むものにはたゞ眼耳鼻舌身意の六根清淨を合言葉としたいのである。

我々の道は——重ねて云ふ——己れの心を開き、新なる境を作りゆくことの道である。これが我々の俳句の創作である。我々は、俳句を書きならべて自分の名を添へることを以て能事としない。常に創作し、又、その創作を踏み越えて創作することを以て行進する。我々の道は、いはゞ戦場の如き意氣を以て進むものなのである。

×

抑も、戦争とは何であるか。戦争とは敵を殺戮し、物を破壊し、土地を攻略することであらうか。

否、戦争とは創作である。世界をあるべきやうに作り直し、民族をあるべきやうに安定するといふことである。

戦争は創作であるから、構想と表現とをもつ。日本は大東亞共榮といふ逞しい構想のもとに、南北數千キロに亘る戦陣のすばらしい表現

をしてゐる。東亞の大陸と太平洋とに新しい光の世界を創作しようといふのである。米英は米英としての構想のもとに、彼等の創作をすゝめようとしてゐる。今度の戦争は「食ふか食はれるか」の戦だと云はれる。これを、「作るか作られるか」の戦だと云つても宜しい。日本風に作るか、米英流に作られるかの戦なのである。

我々の俳句は、つねに創作の心に燃えてゐる。敵を求めて戦ふ氣持ではないけれども、戦の場に立つ者の緊張した心を以て平常の心としてゐる。たとへば、腰に一すぢの秋水を帯びた氣持である。人を斬る爲の刀ではない。戦士たるべき心構を示したものである。「活人劍」といふ言葉がある。境を生かし、人を生かす、これこそ這裡創作の妙用である。

×

此の大戦争のさ中にして、何の俳句ぞといふ人もある。それで、遊戯一片の定型俳句は、健全娛樂といふ名の下に時局に迎合してゐる。我々の俳句はかねて戦争におどろかざる心の中にある。「平常の心是れ道」である。だから、戦争の時は戦争と共にある。やはり平常の心である。特にかくべつの身構をとりつくるふには當らない。又、特に戦争を題材として、戦争らしい顔をするにも及ばない。いま、日本の國內に於て戦つてゐないものは誰一人もない、又、物一つとてもない。鳥の青菜も戦つてゐる。蜜を運ぶ蜂とても戦つてゐる。されば、一莖の青菜を詠じた句も、一匹の蜂を詠じた句も、それが我々の道を求む

る爲の言葉としていあれば、是亦、日本の美しさ、日本の清らかさを世界に證すところの一つの眞實なのである。

——昭和十九年五月十八日

「俳句日本」への希望

中塚 一 碧樓

總力決戦の下、國內體制の整備強化されるに當り、俳句雑誌も遂に統合の止むなき事となり、茲に新俳句全體を一丸とする新體制をもつて雑誌「俳句日本」の出發を見るに至りました。

各社の相異なる性格に於て、こゝまでに到る迂餘曲折は全く一通りのものでは無かつたのでありますが之れは姑く言はず、たゞ西垣正禪子氏の終始熱心なる斡旋と、當局の方々の好意的助力を深謝し、こゝに明記して置きたいのであります。

紙數が幾ら僅少にならうとも今まで通りに單一純粹に雑誌を續刊して行きたい、と之は私としての豫てよりの念願であり又覺悟でもありませんが、今や、さうした事はさつぱりと水に流してしまつて、決戦體制整備の國家の要請に順應して、新體制に據つて行くべきであり、これこそは日本國民として踏むべき常道であると思ふのであります。

この「俳句日本」の發刊によつて私たち新俳句陣の持つ雑誌の形式は先づ整つた事であつて新俳句にとつて之は一つの喜びであります。

乍然、單に雜誌が出来るといふ形、それだけに終つてはならない事を此際特に言ひたいのであります。

元來私たちは形式よりは寧ろその精神を重んじ、どこまでも精神的に生き抜かうとするものでありまして、之は私たちが數十年來堅持し來つた傳統であり、今後もこの信條が變らう筈はないのであります。それは私たちの一句一句が字數などの形式よりも一句が持つ精神に重きを置いてゐる事によつても明白であります。

數社の統合によつて雜誌は出來得たのであります。各社自ら相異なる所もあり、今後氣持に於て眞に協力して行き得るか否か些か憂へざるを得ない處であります。然し今はさうした事を思案してゐる場合ではなく、各々本氣に自肅自戒し、一方には精神的に互に善導すべき積極性を持つやうありたいと希ふものであります。

更に重ねて云ふ、私達をして雜誌の上での統合のみに終らしめてはならない、それが精神的結合のよき機縁とならなくてはならない。私達をして所謂烏合の勢たらしむる勿れと云ひたいのであります。

戰苛烈なれば苛烈なるほど、國民の心持の磐石である事を必要とする。その磐石の確かさを持たうとする私達の作句修行は、決戦下に於ていよいよ必須であるのであります。

國民の士氣振作の上に、日本精神昂揚のために、諸氏益々作句に精進され、張り切つて御健唸のほどを只管祈り上げます。

我らの新出發と指導精神

西垣 出禪子

我らの統合は單に雜誌を合併したと云ふことに止まらず、俳壇總力戰の意義に徹するものでなければならぬ。組織自體には殆ど何らの力もないものであるから、そこに一貫する精神とこれを驅使する人とならなければならない。また、組織と精神と人間との關係に於いては、第一の重要性を指導精神に置かなければならぬ。

この指導精神の問題は、新時代の支柱となる歴史的原理の創造であり、人間、社會、文化に就いての考へ、及び考へ方の一變が、その根本から迫られてゐる所の積極性——新俳句は生産的活動の實踐に於いて積極的主體性より要求される——それは一定の發展態としての現實の世界の無限なる辯證法的過程への自己還元であらねばならない。

(註) 實踐は矛盾する興味の間さまよふ事ではなく、歴史的現實の必至の上に立つて辯證法的に展開するものである。主觀は絶えず實現せんとする意志であり、客觀は「我」の性格を揚棄して民族我若しくは社會我的性格を把握したものである。

かくて、「我」は主觀我と客觀我的二重の性格を永遠に具有してゐる。この確保こそ「我」の實現の契機であり、この限りに於いて、

眞の客観とは主観より客観への轉生であり、自我統一の秩序の上に客観性を把握せる形相である。

別言すれば、無限絶對的生命の希求であつて、この新俳句精神とも云ふべき論理は、俳句に於ける社會的實踐の自覺の論理（反省的統一の論理）でなくてはならないのである。

俳壇の總力戰である國民運動は、この新しい俳句精神によつてこそ實現され、そこには亦、新しき精神が要求する舊來の觀念に對する變革、即ち、舊俳句體制の根柢をなしてをる瘡の切解から始めなければその實は望めないものである。

一頃生活俳句と云ふことが云はれた。當時の生活俳句は單に思想の傳達が目的であつて、藝術の方法性を無視した。また、舊傳統派は俳句の第一義底は花鳥諷詠にあると云ふ皮相な觀念を助長せしめたのであつた。大體この生活俳句がおかせる誤謬は、俳句の社會意識の強化に於ける文化が政治性をもつと云ふことを、俳句文學の本質までも無視して、政治のもとに文化一切のものを手段的に取扱ふ隸屬のことだと考へたことであつたやうである。反對に、社會と遊離し世間から越脱する態度を教へたものが花鳥諷詠俳句なのであつて、霧を食ふ仙人俳句作家を尊しとしたのである。

今日では敢えて藝術活動を狭く作家（作品を作ること）のみに限定しようとはしないし、作家は俳句人であり同時に國民の一員、否臣民の一人として鍊成せられてゐるのであるから、我々が俳句せんとする

精神は、俳句人の生活希求に於いて、たえず優越なる根源への把握といふ反省の自意識（無我の精神）に立ち、報國精神への徹底と、日本肇國の大精神の顯現にその本質を見んとするものである。従つて、作品は本質の顯現であり、從來の生活俳句の如き思想傳達の手段化ではない。如何となれば、我らの行爲即生活の俳句（藝術）は、精神（思想性）と技術（方法性）とを同等の對象として、平行的に對立せしめる在來の生活俳句的認識にあるものではなく、優越なる根源的意味の統一にあるから、この技術は價値の意識の主知への秩序であり、行爲の根源への自覺が含む實體的直觀であるのである。

かくして、作品の價値は方法論にあり、方法論（根源の價値行爲——反省的統一）を持たない作品は、現實の行爲の規定に立つ生命（生命のリズム）の實踐であるとは云はれないのである。（註）

俳句の國民運動に於ける新世界觀への出發——眞に前進を裏つける新時代の精神は何か——と云ふことが、我らにあつては日本精神の強化であつても、それは抽象的なものであつてはならないのである。即ち、具體性と現實性に於いて——日本精神の表現は必ず現實（場）に於いて——把握體現（全人體験）されてゐなければならぬのである。俳句に於ける生命のあり方は、環境なり自然なりを無視してその存在はないのであるから、我らの生活即表現である俳句作品は、必ず生命を顯現せしめる「場」と共にあらねばならないのである。

かくの意味に於いて、そこでの花鳥諷詠作品はたとへ復古のやうに

感じられても、それは同時に革新であつて、過去のある特殊の時代の特殊の歴史的事實を單に固定的に絶對化し、それに萬事を則らしめると云ふ膠着的、超越的なものではないのである。我々にあつては行爲を通じて建設し、建設を通じて行爲する俳句の歴史的現實に立つものであるから、そこに於ける復古は、一面復古であつても現實の時局の意識が、我々を人間のまた民族の自覺に立つ日本國民の本來の本質に生ける「動ける命と魂」とを求めせしむるところに、眞の復古の意義があることを教へるのである。この生ける動ける姿に於いて、自然詠本來の精神を擲むでこそ、革新とも發展とも云ひ得るのであつて、俳句に於ける傳統の正統性はこゝにある。

我らはいくまで民族的國家的自意識に立つて、俳句に於ける傳統の正統性を正しく樹立せなければならぬ。作家は皇道精神を體する俳句人として生きることが、即生活俳句作家として生きることであり、俳句の作品は、本質の眞實を行爲を通じて實現化することの實踐でもあつて、無限を有限化し理想を現實にする一つの文學的技術である。

かくて、新しき俳句の道が「行爲の俳句」の傳統を活かすことにある以上、俳句せんとする行爲的信念は、個性の歴史的現實と云ふ眞の認識の新しい精神に立たなければならない。それは、美的理念——實的な現前の體系的內容（藝術は技術であるが技術は既に藝術ではない、と云ふ反省的統一の文學に於ける意味の把握）となつて、眞に日本精神の體現である生命の俳句が誕生する所以ともなるのである。

(註) スタイルとは文學による認識であり、謂はゞ人間直觀の精神が「文學の方法」に於ける限定である。また、フォームとは文學が技術を用ひる經驗であつて、言葉を採用して作品をなすところの直接のものである。非定型の俳句文學にとつては、方法的な俳句文學様式と、直接的な俳句文學様式との明かな矛盾が統一されるところに個々の俳句文學の内容があるといへるのである。

然しながら、この矛盾の統一とは、行爲そのものを靜的對立とする理論的立場からの對象としての理念であつて、實踐に於ける對象は常に我に對して動的の對立をなす、それは、超越的なものではなく我に根源し我の眞實體に外ならないのである。故に實踐にあつては、行爲の根源は即ち實體にあつて、個性的な意志の實在にあることは既述した所である。即ち、生産的意志が美的個性化し、體系化する意志に根源するのであつて、俳句行爲の本質としての意志は、深くその同一性を支持する。而して、かくの意志なくしては行爲の實踐は成立たないにもかゝらず、藝術に於いては、ある一つの意志が直接作品とはならないことも、技術の根柢に考へておく必要がまたある。「關係の技術」といふ新俳句藝術の律性はこゝにある。

今日の俳句人とは、彼の俳句行爲に關する彼自身の方法の自覺にはじまり、詩美(ポエジイ)を進ませる藝術行爲に關する價値の行爲者、眞に反省的批判的方法(自然發生的なポエジイによらない無限絶對的生命の美價値把握)の技術家である。

海紅句録

一碧樓選

春宵出撃する吾らに麥芽にほひくる
分隊員異狀なし地に咲いてなづなの花

千葉 守矢 日出男

梅の花 咲く庭の石皆濡れて
裸木影おとす水明らかに流れ

新潟 金子 曙山

防空頭巾の子供たち梅咲いて白し
爐塞ぐにかぐはし彌彦山なごりの雪

新潟 金子 曙山

早春山の雜木たばね雜木の伐り口

〇〇校 中 塚 檀

斜面すかんぼが伸び私巻脚絆しつかり巻いた
攻撃を決心げんげ花咲くに地圖をひろげ
鯉が正しく泳ぐを見た梅の青い實の下

石川 松原 颯々

征きのこり海邊陽炎がたつ畑
實 彈 演 習 の 潮 に 消 え て 泡 雪
鍛冶屋雪ふれば妻と打つ農具せまきなかに

新潟 小川 光明 樹

いちじく粒々の實と小さい葉との或朝
雨來るか傾いてちいさい葱坊主
げんげ田一枚ありずつと工場の建物

東京 根 木 浩

疎開決心母と子に椎の木若芽
根雪まだらな林椎の木を吹く風

沼津 伊藤 彌太

われ一兵のこゝろ描く二月やまなみ
刻移る冬木冬草の芽のしづかなる
春待つこゝろ庭石大きい冷えて
工員の顔よし桃畑を通り

秋田 村上 呂半

まとも残雪の晴るゝ朝の飯くふ
少年戦士たちに雪山、大いなる容
口づけてのむ雜木芽ぶく中の山みづ
淡雪ふりくる竈口杉の葉燃えて

諏訪 矢崎 博敏

馬耕鋤先から目をはなさず話す
春の日我が居る谷の木々を出る雲
供出薪を束ねる山 残雪へふる雨
山吹の芽のふくらみ丸太をかつぎ出す

丸龜 佐藤 保民

男は早春の夜の門をでて星のない空をみた
風の中げんげ摘むげんげの匂手にしみる
菜種も名残りの黄に遠し彦根の城

北支隊 本間 昇

土のついた地雷ぶらさげて歸り置くに地の芽草

疎開決心母と子に椎の木若芽
根雪まだらな林椎の木を吹く風

東京 根 木 浩

花の白いゑんどうのびてゐるそこを通る

濱松 永井はるを

中支隊 小竹 利和

大地一齊にいま芽ぶく國をおもひて

枯草にぎり敵輕機の間斷を待つ

早春空のいろけふから工員となる

撃滅の一念枯草を疾走す

すつかり霽れてしまつた空の灌佛會

くにを話す友菜の花をいふ

常在戰場のこゝろ天も地も眞冬

大阪 大倉 芝青

宮城 島林 庄作

刈田のなかをあるき帽子冠つてない男

經過幾日の室へ鳴き冬の鳥(手術、二)

麥青きを一列になつてみちをくる人々

生きて霜の朝々のこゝろしつかり冬木

陣地ある山の草枯れてゐる山の上

山をくだる山の雪軟かく

宮城 宮本夕 漁子

馬に乗るに屋根に雪あり

龍骨たくましくをとこあるいて冬の日

このみち雪の上に落ちし杉の實

ひろい海を構想するひとり立つてゐる冬木と

愛知 鈴木 邱石

工員たち黙つて造船所雪ふりくる

越後 三雲 城東

お涅槃この日に思ふこの赤い椿の花

遠き兵の匂とどく天から吹く雪解風

露の臺ありけふ大きな雲のかたち

池水にどんく雪ふる工場へ急ぐ

この日枯芝を人人戻るみんなが顔

落ちて軒下氷柱ありこの家へはいる

長野 御所窪 けさじ

香川 新田 巢州

この朝地向ひて少し寒い枯草にすわり

社の裏の木の下に来て残雪があり

山道を少女と犬とすつきり春空

山の雪とけ始めたを川に添つてゆく道

隣人と麥のびたこと話すそして戦況を話す

男子みな御戦に征くを露の臺の出でて

秋田 石岡 水鳴

宮城療 谷口 矩良

戦列我等立つ葱畑葱の花咲く

これを食べるとし摘草淺みどり

種粃を播くいのるこゝろ水に影あり

浅春藁打つ音の薄日に雪とける

野びろ夜にほふ爐火を絶やさぬ

この母の背低ければ藁靴愛とし

濱松 伊藤 雅章

はなれてくらし大根花咲きそむる
多の日明るくて子にやる手紙を書き妻
椿落ちてゐる中にある眞新しい椿の花

北支 万代 船平

机上 雑然 一輪の水仙ありて
池水あたたかき思ひ芽ぐむ木々は上に
句を思ふに草青みひろびろし

大阪 虫明ひろむ

峯を仰ぐ黒部路動かざる樹々の雪
彼方水鳴る山峽明けの霧立つ
山高きまゝに雲あり四月に入りし

宮城療 日下 丑松

冬夜の松風の音ばかりの山療
癒えて征かんと梅の蕾のかたし
父と肩を並べ今ぶだうづるのせんでい

宮城療 酒井 兵一

朝の日課の散歩山鳩の聲しきりなり
我れ水仙を活けて時をまつなり
ラジオが療養所の時間シクラメン咲きし

東京 下平 天耳

碧庵 百日紅 冬木 蓑 蟲 此日
増産 薬工 品爲事 ひくき 太陽
梅二三 分咲き 身近に 疎開の話

松江 奥谷 車石

冬雨溝が流れるほどに工員歩みをかへず

雪沓穿いた軽い雪沓のあとをつけた
けふ溝の深い色川底青藻のびたり

北部隊 澤口 潤一

二日月山に在りて我等號令調整す
春遠い雲千切れてゐる深呼吸する
水仙數株雪をのけて青々しこの庭

愛知 鈴木 一斗谷

木苺の若葉が濡れるほどの雨の日
鳥一羽春の日のこの水へ下りたり
風吹く木のこの木苺咲けり

名古屋 平井 青三

海一ところ日が照りひとところ岩に多波
餘寒朝々焚火けむりのなか話もなく
山脈雲がうごいて雲のごとくに残る雪

岐阜 眞葛野 太郎

正月中支から来た君の軍装によりそひこども
砂とる男親子にて柳の芽
山ひくゝ家ひくゝ冬野かたむき

名古屋 加藤 勝一

男銃をみがく木に花が咲き満ち
一ところたんぼゝ咲き満ちしを兵ら縦隊
歸るべし地にはこべ萌ゆるべし

東京 金内 錫四

空に白雲あり朝の雪いたゞいた樹々
冬木生きてゐる寒の日われらに石ころ乾き

多の花挿してある女工員等に部品冷える

備前 黒瀬 潮鳴

雀飛ぶうす霜の地くぼみ

梅は小さく咲き庭石淡雪に濡れたり
木々の間の春暖しみく出勤の朝

遠山はみえず吹雪に眞向うて歩み

八王子 小坂 眞二

土筆とりに子供この日の顔々

宮城療 齋藤 達也

備前 仙田 黄葛

梅の花は夜も咲いてある人ら集りし室

宮城療 青木 光生

はこべ草の花しろくてそこら陽のてり

したしめる石垣の草の芽のびてある

麥田たしか低いと見て八幡宮に参る

草萌えてくるその地に足ふれてみる

宮城療 つちや三省

北部隊 大淵 青柴

みんな寝てしまつてからの春の空雪の闇

けさも雪のついた窓おす低う家々木々

雪解けの水低きに流るる療院の一隅

雪代流れる小川の橋はなれない子供

諏訪 中村 常男

青森 工藤 折葉

子ら藁草履をならべそこにはこべがもえる

馬糞つゞくつゞく手綱とりしは兵にて

次女挺身隊に参加す

あたらしい地下足袋の小はぜはめてある春土

挺身隊に出るといふ爐によりて話す

水邊に葵咲盛るを見て黙つて歩く

子は子のこゝろ水仙の窓あけてある

地を這ふ藜の葉其の下の紅い蔓

備前 二宮 香芽子

宮城療 村上 幸吉

蓬もえである春陽の中を歩く

球根掌にあり地に坐る傷兵ら

兒等をりて白い小さいぺんく草の花

架橋演習兵一人一人の構へ河原青い草

菜を洗ふにもう花がついてある

春雨に小砂利ぬれたまゝ踏みしめて行く

佐渡 丸岡 岳人

庭土乾き蟻の歩み續きて

小麥の草採りをへぬ母にけふしも微風

岡山 田邊 苔香樓

畑を墾す心地籠一杯の芋種

かすかに水車の聞える山徑でぐみの實
山羊の乳搾るに青麥よりの風

會津 渡部 華正

残雪とところどころ鳥の聲身近にきよし
會津は寒し木々の枝がゆらぎ

秋田 高橋 安榮

曇天 辛夷花ひらく家に入る
線路ぬれ朝の野火一方に燃ゆる

佐渡 松岡 葵々

雉の聲するどく私ひとり土手を行く
はだら雪畝々此簔影から寫眞撮つた雪山

備中 天野 香海

春汐動き釣人一念長き竿もち
枯草原蓬のみ青くて蓬摘むをみなご

新潟 丸山 白水

鐵骨無雜作に置かれたり雲雀鳴く
雪の連山春遠き港を出づる巨船

秋田 堀 江 孟

接骨木の芽くさし家低く雲低く
寒肥引き終へし田をとんでゆく鳥

備前 仁科 孝子

春夜 友とゆく空にある星
早春朝風あるを起き出でて私が着る一枚の着物

岡山 二宮 秋歌樓

早春の日は落ちる備前低い山

小驛わづかな葱島があり渡車す

諏訪 新村 満壽雄

造船 健闘す幾人早春風あり
早春ばん釜焼ばんわが思ふ色にいでて

諏訪 玉木 和美

早春雲うごく空を見てゐる屠夫
石ころのひとつひとつ影ありて河原早春

昭南 石下 白想

ねむり草がある道端に踞んで話す
枯草焼く煙と夏雲と動く杜の上

京城 浦 麥水

京城は城壁の街城壁は櫻満開
水満々 粃尊く芽吹いて居る

宮城療 小野 寺風蘭

物皆に影歸りききて春夜
語ることもなけれど春の夜の雨ふる

佐渡 龍浪 龍雄

海岸線一帯春めきし岩蟹を捕ふ
溪に水満ちて椿陽あたりよき溪

備前 二宮 清澄

征く子等に春日照つて居る山
編隊機 過ぎたあと春陽山畑

岡山 南洲 多美子

そらまめまだのびる低い垣根に

秋田 佐村 陽水

苗代薄氷へる農人陽にむいてゆく

新潟 八木

茶凡

春日山道ゆくに谷川遠く水音

島根 逸見

孤舟

風に向ひゆく荷車をひきて浅春

島根 徳光

梧郎

母の忌日の桃の花咲きて家裏

東京 牧

白蛾

靖國の春空この日鳥居へ人寄する

羽後 高野

奇山樓

残雪の校庭より歸りゆく童の騒ぎ

東京 島田

啓生

猫柳を生け家はしづかなる午後

海紅近作鈔

東京 吉川

金次

一筋春の川をかんにてる工場のうちにゐる

辛夷花ありわが作業服を着る帽子かぶる

氣持残業が體にひびいてくる蒨稜草すこし夕餉にする

麥の芽あり母が死んでる

野に斑雪さうしてわが母の骨をあげる

諏訪 山田

蒲公英

残寒家ちかく家の灯りゐる

動哨あるときは見る地に萌ゆる草

崖のうすあかり土と芽をもてる蔓

谷深く谷の形に檜の木立つ芽だつ

雪残るあかり林の中人のこゑする

秋田 相澤 華芳

造船工場在り寒明くる大さ河在り

水がにごつてながれ水のひろく早春

母と在り或日は冬菜きざんで食べる

水の中へ水底に萌え出で水草

榛の花咲き溝のべそのやうに在り

北京 深尾 けん 艸

単機戦闘機冬天を切る高度

土をほぐしふるき草の根の土をふるふ

地に仰臥して整備完了草萌ゆる

突切らん山は春の山雑木の芽

耐ゆる生活に菜種の花を生けてくれし

諏訪 守矢 自由也

決戦の歩 武蓬草簇々生ふる

一天霞むけふも彼方に敵機を墜す

音なく鶴鴿が尾打つくるき巖

次男太刀洗飛行隊入隊、二

山辛夷の花の白い方へむかつて征く

獨活など食べさせて送る母の決意す

北部隊 根岸 榮 一郎

國恩白い餅あり春夜戦況をおもふ

南の英魂に轉る工員の人等と戰場春朝
 春夜、陣の建物つめたいたい人の群が動く
 寒さのひそむ部屋に春夜一きれのパンをいたぐ
 牡丹雪地に消ゆる父が忌を迎へこの朝

秋田 至國屋 自省

淡雪のけさの倉庫屋根幅が大きい
 雪が残雪のさま戸口あけてみて子供
 牙えかへる樹の一もとのぐるり
 沙濱かくて雪きえようさま浪遠く
 獵友はすでに山に雪に跡があり

越後 長谷川 杉郎

雪はものを埋めて木の上の星
 辛夷の花に風吹き弟とあるく濱邊の方
 石材ひかる狭い町幅を燕がとぶ朝
 無花果の葉若し俺が一本の脚
 漆の芽あかるいをあした越後へかへる

東京 星野 武夫

夜勤して戻る青空木の雪のとびちり
 家うち日さし太いほうれん草をゆでる
 冬の夜風が止み少しある乾燥の野菜
 夜勤の人と交替し旋盤にぬくみあるごとし把手
 深夜作業雪の降りはじめたことを誰か一言

中支隊 富岡のぼる

ひろし凍草のひかるをふみ隊伍
 冬の日壕を掘る兵と離れて練兵の隊伍

待機われらが日々の氣魄なり地の草芽なり
 空地さながら硝煙をかんじ草崩え
 戰場にあり地の霞みてとほくあり

東京 林 鷺水城

春らしい日の窓の陽僕らにくるく機械
 花が終りの梅この山のあかり
 降つてゐる雨が流れてここに生えてなづな
 はつきりみづりみのあかり屋根の雪とける
 人のゆき、春の日の溝水この窓

京都 西山 刀耕

猫柳咲きては堂々の構想にして
 山鳥の毛焼き荒しはりど星あり
 工員善哉葱汗それとなく春動き
 笹鳴潮を呼ぶうす明り舟つける音し
 晩霜來べく來し光學兵器があり

諏訪 武居 泊雨川

近く兵器工場があり齊をつんでゐる子供
 鉈を提げてゐる辛夷まだ咲かない
 兵器工場のひびき一望暖い地のおもて
 印度進撃このとき窓から見えて耕人
 歩哨兵が見るとなく山が春日のくもり

札幌 近藤 紫村

闘魂日々をけふ寒鴉啼れたり
 お雛様の唄をうたつてから飯を食ふ子供ら
 大いなる國冬を征く君に照る陽

衆生の恩恵をかんじ終日降る雪に坐す
漬茄子うまし妻は事もなきふりに坐り

新潟 中村 乱水

坑道炭車走るそしてきさらぎの野へ
草が萌えて炭坑へ這入る登音つゞく
地底炭層あるを思ふ白桃風吹くに
山のなだれに蠶豆が咲く薄日礦山戦士
入坑人々につゞく春夜の冷えを來しからだ

東京 今井 六石

バスゆく手大きな芝山が見えくる迫りくる麗日
鹵獲米機一つ櫻冬木の中に置いてある人群
月頃の雨夜あかるく大き岬山
春日たかしわが前大浪の重りくつてよする
歸雁朝々わが家の四方が丘つゞき薄靄

岡山 田邊 愛水

戦ひ抜かんわれらに溝の雪すこし残り
兵と枯草と道があかるい地にて
土筆摘む一人の子供の顔しかとみつめる
戦友をおもふ麥田あれば麥をおもへり
應徴一家ありひろく春田霜あり

東京 石水 奔流

御製朗唱終る冬朝の機械廻り初めたり
地に立ちて念ず秋の日人らと一方の空あり
視界冬の起重機がいま鐵板を上げる
南瓜の芽どんだん出たそれから家の者ら顔洗ふ

僕の戦闘帽の汚れけふ柳青きを目にす

伊豫 菅 木葉

麥に水肥かけてゆく杓の柄ながく
早春地に掘出され古木の根のふとさ
早春凍てたる田川の底の藻いちめん
流れる水の音たてつ麥野にふかき溝の一筋
扉の開いた門のうち彼岸櫻仰ぎみる

京都 川島 南海城

地に冬日あり子供が歩いて薄く降る霜
一方雪の山高く大根畑に大根あり家を離れて
座に佛像あり一碗お茶が冷えし残冬
父人斧を抜ふうしろが雪山
國民一機一機のこゝろ少女草籠を負ひ行く

在鮮隊 岡 涓 二

木に石に残雪あり一家疎開をおもふ
子とともにめざめ春雪ゆたかなることろ
さくら芽ふく油まみれの機械に手をかける
梅さく梅の木ね防空壕ありて

秋田 木内 柳陀

沖は遠くまで青空入つ手咲く
濁氷るこれからの網を下ろす
辛夷かぜにあり人に逢ふ
おが屑落ちる機械の下跣足で

尼崎 林 さあを

柴音たて燃ゆるはらからに幸及ぶがごとし

そらあかるみある豌豆をむく箕のうち
山にやまざくら咲くいとせを朝の山かたち
帆綱によりかゝり見ゆる遠き山火にて

秋田 相場 汀石

樺大木の供木根のまはり雪消える
晴れてある見えて春の驛の空兵營の方の空
墨をすり残雪墨をふくんだ筆を見る
山どころにくる水田の雪とけてくるひるなか

備中 瀬尾 一風子

その方へ向く梅が咲いてある畦
釣のみゝずを掘るよその家の土
春朝冷えること菜の花
春籠を釣る人藪の出はづれのところ歩いて

羽後 杉村 木々人

女貧しい湖の春水ながら
兵征く兵還る山の雪の消えつゝ
土重しこれを客土す少女
農家厩肥農家春の雪ふり

備前 山本 光王

冬日入隊銃架に銃があるを背にして立ち
風寒い路にそうて藺田を植ゑる男
春寒母がをる家のひくいばへ垣
枇杷の花がついてある君が軍服を着てくる

東京 後藤 零丁子

沈丁あり少女勤勞隊ひるのやすみ

殿し追はるゝやう二月となりし沈丁のつはみあり
浅春敢闘一ばい熱い茶ふいて男工
凍地つれだちくるこゝわかるゝ男夜の暗きに

新潟 佐藤 裕山人

榛の花さき雪解のみちの竊立ち
雪の上藁灰まき胡桃の枝逞しき
雑魚捕り川下りゆく残雪がありて
雪間に菜顯はれし陽に向ふうねうね

濱松 口田 朴也

はるか眞黒き鴉が飛ぶ草摘む男で
水平線へ平な海で春を人達祈る
山焼けの山へぐんぐん登つた男で
鳥影の草原を歩む帽子を脱ぎて

和泉 牧野 秋風嶺

訥々もの言ひ電燈明るすぎる冬の部屋
家ぬち神を祀りつゝましく霜夜
馬逞しく雪かたき田の畦にある
雪山のこゝ水湛へありうすにごり

諏訪 宮坂 岱風

日が射し猫柳に聲をかけたたく
藁乳穂に雪横なぐり藁乳穂をくづす
煙が窓から出る氷柱がさがり
岸に氷が残り雨降りやまず

越後 須貝 秀

應徴士章胸に今朝の山に對ふ春山

人のこゑ春めく家々の棟樹々より低く
耕牛に耕婦に田が乾く日中
苗代田水張りそして四月の山雪山

富山 宮岡 珠 鏑 樓

雲々のうごきまだ芽ぐまぬ大き桐の木
起きて粥を食ふこの朝にして木蓮赤し(病中吟)
お粥一碗いたゞく皿の青菜の青し(同)
名残の窓あける隣家の木蓮さけり(退院)

秋田 佐藤 禾 黄

土筆生えしわすれない忌をいとなみ
大きな斑牛で夜の野火燃ゆる
朝のそら晴れ種蒔くみづの鳴りて
あさからの小鳥が木に啼かないで春雪

東京 滑川 三千夫

空へ高射砲の弾道をおもふ春の雲あり
工場の高い窓ガラス風あたゝかくなつた

第二人時を同じうして應召

祈願すれば降る眞白なる雪降る
今弟が門を出る雪面陽のひろきさま

東京 沼 文 生

歸農する人に裏山に辛夷花さく
崖下川をへだてゝ菜の花がさく二階住ひ
菜の花に雨がふるこのみちへ踏み出す
或日巻脚絆の若もの焚火に面をそむけて

京都 松宮 磨 研

地に甘藍まるく農女の顔丸く
薪割るものに淡雪ふる身に雪つけて割る
菜種つぼみもちしを活ける父の忌日に
奥からものを云ふ浅春の農具うるみせ

小田原 堀川 才 次

小川の水流れ石をなげ子供春の日
朝は小鳥の木まつすぐ春の風吹く
さやゑんどろ施肥を土よせを白い花
少し残りし見ゆ畑すみの葱坊主延びた

栃木 黒丸 古 生

歩いてくる人あり梅の徑が坂となり
春朝挺身隊一團が来る工場板塀
轉業轉身春浅き朝軍手をはめる
雪代流れ男の子はだしでゐる

鐵嶺 永田 禾 陽

通學の子等と仰ぐ雪明け空の一機一機
木立陽炎に浮く一眸麥畑
雲大きく影す斜面に若草若草あり
われとありて杏の花ひろふ子の小さき手

長野 半田 雨 衣

曇ふるを話しながら来てしまつたところ
春朝出て来る男ゲートルかたく巻きし
春先葡萄畑の中にはつきり人みえて
麥に土を入れる葉にかゝる土で

岡山 笠原 大能 露

灯の下置きし草餅ほのかなる色
釣竿を袋の中に山々霞みたり
本堂春光御佛體二體を拜し
裏口から山へ出て行く春蘭の花さく

會津 渡部 湘雨

農地眼の前に住めり椿花咲く
連れて馬は土嗅ぐものに春日
國戦ふ雪しろどんどん海にそぎ
來るを待つこゝろ苗代搔きて

京都 泉 大 畊

その姿馬鈴薯を植ゑてわき目もふらず
征く壯行の空廣し遠く山焼
湖に對す宿なり野焼け燃え盛る夕
馬鈴薯植ゑた凸凹の畝をこの日雨ふる

北海道 秋 元 櫻 水

國戦ふに鬪病 春日 雞ゐて
決戦機材の山凸凹凍道つゞく
茶の花の軸を見る鶴平翁今は亡き戦果の日
國強うして山火夜となりしけしき

鶴見 大川 しげる

木蓮の花一木そしてこゝ戦時保育園
闇の街に續く工員の列が春の夜
春風にさそはれる人とは別な氣持にて行く
春の日思ふこと増産のことのみこの朝

名古屋 加々美 絹子

人と話す石垣に咲いてすみれうすい
芽ぶく楓の木が空が冷えてある一日をわたくし
小溝流れなく日日を水草うつくしく
土筆を摘んである母に話かけたくてこゝろ

諏訪 山田 不露郎

雪ありて岐れ行く山裾一方のみち
かわいてある連翹の花と石垣の石
藪が芽吹くにゐる私の厚い手袋
農業要員となる葱の枯葉をむしる

備前 松本 西平

沈丁蕾ありそこから出入りする家族
浅春征く君と花ある木瓜の一瓶
雨ふりつゝ菜畠の菜の藪
道が濡れてゐて菜の花が咲くを行く

在佛印 梶田 羊介

どこでもひろいばかり安南の人にこんな竹藪が育つ
プノムの塔が見えそれから領事さんの白服が緑蔭
祭の前の散歩道だカンナなどと咲く
水面藻草びつしり日本人モリモトの話聞く

大阪 浅野 麗木

早春地に鳴き雀はそこにとぶまでゐた
菓薬ごと見せらるる雲雀の裸子を見る
日長れば愛しく杉菜の中石々
こゝに葱坊主かしこに葱坊主くれてくる畠

沈黙そして夏みかんの皮のぶ厚さをおもふ

名古屋 加々美 青河

陸集

卍禪子選

藪椿やぶに咲けり彼は一線にありて輕機火を吐くか

子ども母の背にねむり馬酔木花咲くべ

花咲いた菜畑から見え戸のない厩の口

人に逢はず疾風青麥畑

土筆をたべて念ふ弟を雲消えずあれば

昭南 中田 紅甫

カンナ暑く犬が地を嗅いで来る私の方へ

防空壕に小き草生え雨季明けかゝり

マンゴの大きな陰子供青き實を見上げたり

兵がしつかり歩く炎天棕栢の花咲き

何かもの足らぬこゝろ逆光線の佛桑華

東京 宮林 釜村

遺骨重たし春雪降りしきる夜(信濃行、五)

綿の木低く枯れ地に小雪在り

凍乾いた土堇哉の墓が立ち

雪山漸く晴れ舊友に逢ふ道照り

春霜法要の團子わかち合ひ肉親

東京 福島 一思

辛夷咲くとおもふ石垣のところで遊ぶ子供ら

寒木瓜の鉢などそこに置き家の主人

家からはずつと来た梅林その上の空

子供が駈け下りる磧のところが冬芒二三本

子を連れて通る家裏のところも道に残る雪

鹿兒島 遠矢 鴻丘

珠數玉枯葉われ前こごみにて歩く
一せいに咲きかゝる白木蓮の曇天
如月の雪やみ晝からの日射し炭の白き灰

東京 本多 冬城

枇杷の花障子の糊の乾ききらぬ日ざし
月光ふりそゞぐところ水仙いさぎよし
獨活に紅さし燈下赤いクレオンをさがす

岩手 加賀 谷灰人

庭の桐の木これより靖國の宮へ參る
杉坂四五人下りてゆく中尊寺が春
うすぐもつてゐる初夏の川下にも橋がある空
日が照れば北上川むかふの岸の小松原

一宮 伴野 龍

拍子木が深夜の星へひびき子の寢いき
汽車がみえるかぎり旗ふりやめず
ふつくりした小鳥羽まるめてよぎる葦の葉
呼吸をとめて聴いてゐる子つづく黙禱

上海 大島 椿花

大本營發表に片唾をのみ夜の水仙の前
すなほに窓閉ぢ張切つて學徒らは行く

大阪 山口忍非郎

柳銀色の花芽あるじこの時も聲す部屋ぬち

東京 酒井昇

初夏心せく此の頃の我となりけり

東京 豊田常三郎

鯉幟われ男の子となりしよろこび

東京 副島徹

友と別る故郷の祭も過ぎし

東京 大山正皓

今日の終りオリオンは西に沈み行くかな

東京 竹内一雄

葉櫻の濃い緑朝の校舎を覆ふ

東京 渡邊志郎

断乎粥を喰ふ事とし山内牙え返りたり(戦局重大)

千葉 淡路呼潮

芋の蔓引けば芋の太くまろく明日の代用食とする芋を數へ

東京 箕輪十三叟

掘つたまゝの諸さげてゆく秋の句味

堺 (故)福田 半僧

鶉聞く歸還の夕べ母と厨に在り

兵庫 丹羽 黙平

白衣清く鶉の床に仰ぐ天日

東京 木暮 羽六

あ子 覺悟を述べる早春の樹々立ち

長男無事入隊二句

別に言ふこともなくてわれにあ子に降るは春の雪
いでたち同じくして並ぶ肩に降り春の雪

暗渠排水作業

やまとは瑞穂の國この土がもろてざし

浦和 山木 六合

古賀元帥殉職

楓若葉燃え盛る日巨きみ靈還る

古賀元帥逝去三句

巨星が落ちた日本は端午の日だ

東京 大熊 敏治

櫻風に散りてなほ静かな花あり

東京 大熊 敏治

み空より散るものゝ淡き花かな

東京 大熊 敏治

散り行く櫻に清らなるものゝふの姿

群馬 佐藤 厚吉

南より便來れり花を見ず征きしよ君

群馬 佐藤 厚吉

よちよち歩くので歩かせる穂の出た麥のある道
ゆふべ飲まぬことに馴れほがら軍にゐる氣持

淀橋 民部 小 尤

殘土一車毎に片付く薫風へ勤勞の汗
雜草のあれこれ膳にのぼせ完勝の箸をとる

大阪 道廣 富彦

劃期的歴史を生む日日を生き生きて春
子へ孫へ未曾有の戰話を日本刀の切れ味を

前線の將兵に應へて息苦しいまで克明に書く仕事(連日夜業)
「死んで来い」と謂ふを喜ぶ學鷲で父一人子一人

福岡 南 畝 三 坡

肥柄杓にへばりついた花瓣今夜貯金常會
春は 絢爛茜さす紫野乙女らの滑空陣

山形 渡邊 舒生

おほばこ摘み杉菜食ふたり勝ちぬかん
軍神の寫眞かゝげ花生ける父の手荒れ

三重 杉崎 鼓波

晴れの郷土機くつきりと影麥畑よぎり
爆音遙か 仰ぐ春日燦と若鷲

三重 高島 石

兵士達銃劍つけ夕闇をゆくやがて南へ
馬鈴薯の太り手にして君歸還兵

三重 川津 一之

眞暗らな海波しろく防人たたせ給ふ凍天
兵は死なず英靈霧の海にただかふ

東京 飯島 郁步

出勤の巻脚絆かたく穂麥のみち
これが敵重爆の巨體いちめんの落花(多摩川園)

福岡 菅 壽 吉

もんぺ似合ふと云へばおどけ顔見せる藤咲き
若葉の下水こんこんと兵等疲れも見せず

福岡 許田 風聲

正面からの彈力劍先初夏の日に震へ
馬に高々乗せられる新兵颯爽と春風

福岡 安田 黙川

若葉影鋪道にくきと行軍の快き步調
季節のもの膳に盛られ戰地へ合掌する

東京 渡邊 如關

草餅いびつそれも口にする間なく友は征き
雀わらくはへて来る日の少年工故郷をかたる

武蔵野 古川 直右

時宗の膳一人一人にともあれふるふ歎
いちご畠芋畠にして信念の歎おこしてゐた

東京 山村 春王月

防空壕のまはりのヒマが茂り子供らかくれる
大日章旗に僕の名も書入れよう陽だまり
秋田辯の挨拶がもう海へ征つたやうだ

東京 相馬 樹 翠

老母も日の丸日の丸ちらく／＼弟は征く
東京 岩館 テル子

米子 繩 義 光

曳光彈未明の空に流れてゆく

東京 服部 竹 映

老幼男女親しく焚火燃え土れ

臺中 本田 茂 光

今日爲すべきを爲し大寒の庭の我影一つ

菊のかげその秋の一日を雲もなく

岐阜 原 丈 鳳

殘菊の空さらに青く澄みわびてわれ一人

米英撃滅のとし食ふものつくる山畑すなだりもかよさず

高槻 森 谷 乙 山

きゆるみのせぬはたらきのどこか牛鳴く

大阪 岡田 吐 月 峰

ふる雨愁なくして戦時下のしだれ櫻けふも澄む

西宮 奥田 我 木 香

冬空たまさかに晴れ渡る空の深さ深し

きびしいくらしそこに一つの工夫を持ち一家朗朗

石巻 佐藤 陸 奥 人

師走我にふるさとなく人等故郷へ正月しにゆく(病田庭)

落葉の枯れ草のちよろ／＼水が春

星を吊り月を掛け寒が美しいまいばん

この家の歴史の大櫓を船にするとて伐る音
大阪 中川 艸 丘 人

みかん皮刻み込む飯この上の工夫もいくさ
戦捷祈願拍手 神籬ヒノキにあたる冬の陽

東京 舟 川 一 男

にふい陽を仰ぐ花かげの白つばい顔顔

東京 萩 原 ア ッ

波の音聴かばや夕日 花束に落ち(鮫洲にて)

山形 會 田 保 男

花の下を通る郵便屋さん海の便りもてくる

吹雪のいよいよ荒ぶ掛聲が消えた(供木)

便りの字踊つてる様だ春の朝日
山形 會 田 武 夫

字が書けて嬉しい征兄さんへお便りする
山形 會 田 英 男

新學期の班長さんで大地ふんでもみる
上海 坂 瓜 辛 ャ

草の芽の弾力今日の地をふんで来る

戦ひいのり深夜の水仙われと對す
長崎 長 山 多 二

印度進撃の戦ひきびし梅の實びつしり

工廠へ應徴す幸福感に照る若葉
東京 山 口 健 介

愛馬鼻よせてくる星ふる夜の進軍

じつと見送つてゐる戦友の眼の色
京都 町 田 三 葉

銘旗に供して公葬場へ曼珠沙華踏む

岩手 照井 稗人 夜の教練は秋の蟲のなかにゐて

三田君戦死

稲穂かつぐ稲穂のゆらぎの秋夕日

東京 濱中キミ子

みたまかしこしさくら咲く空はしづかな

臺灣 坂元

呑空

風の風におはれてたふる稲穂稲田あるところ

東京 横山千代江

石ならばある狭庭ひとかたまりのつはぶきの花

名古屋 鈴木梅宇人

兵隊さんの頬白い窓のかんごふさん

東京 堀之内しき

空は青い拍手の音さうして人々歩く(檀原神宮)

東京 當摩 キン

日の丸のもとと國背負ふ子の肥りて

東京 岩井 照子

暮れ残るあせにまみれた乙女等増産のこと

東京 星野 ふみ

出征中裏の稲穂が黄色に兄様少し肥

東京 横山 あい

星の下で稲のむしがとまるいなごと

東京 濱中千代子

少女に夜の訓練あり秋稲穂もゆれて

東京 田中すみ子

稲の出稲の召され行くますらをの言葉

東京 藤波 きん

いなご焼くにかまもちて稲刈りしことなき身

東京 横山 ゆき

百姓の汗も勞苦も黄色の波の稲穂で

東京 星野 ハナ子

日に秋風の寒くて風鈴がなる

東京 岡村 正江

刈田の男の子の手にはグライダー持てり

東京 元木 サダ

野良歸り月にむかへられる重きは稲穂

東京 藤波 ハナ

風に落つ木の葉の富士の山々に閉ける

東京 藤波 喜美

刈り穂の間の手に持てる日の丸打ちふりつ

東京 大熊 光子

晝は稲穂の音すやしき外の稲穂の色

東京 江川 フク

ふじを秋めく生命線輝く稲穂の中終日

東京 榎本 サク

月がお祭りにあかりひとつない夜の通り

東京 藤波富美代

柿の木實もちて赤ちやんがうば車

東京 横山 たみ

東京 藤波 芳子

日おつる鉄をかついだ兄やわが妹のおもて

東京 江川 ゑき子

みのり目出度き稻の秋晴てるるみのり

東京 横田 すい

あけの草の色にとまつてゐたいなごの小供

大阪 大槻 實

玉碎の英魂に續かん心朝の凍土を踏み

横濱 榎田 東谷

木の芽に息を吹きかける春だひとり

青島 佐藤 光子

南へ草萌ゆ子供とゆく道あり

山口 神保 五彌

櫻咲かむとすその下整然と掃かれ

四日市 伊勢 泗郎

何も言ふ事がない急救箱しつかと抱へ

長野 中村 久重

世紀の門出十二月一日鷓も猛る(葺氏へ)

教へ兒戰死

りくる骨壺のかるさも棧道ふみしめる

泣くまい氣もちがむやみに爐の槽をくべる

三條 大脇 花炎子

一劍空に流れ犀川はただ枯葉が鳴つて

哈爾濱 鈴木 長司

たけりく潮擧手の禮葺さん手袋眞白ち

出征中 赤星 竹嶺

軍服で氣付かない芙蓉を妻に示され

手作りの菓子をつたべた面會所の芙蓉

〇〇先發の戰友に

高木 四郎

興亡をにかけて曆の第一をむく

庭芝の露ひかるに元旦の遙拜

南海の便り來るつららすつかりとけたポスト

武藤 大眞

空を正視する雨の煙むる野にわれら記念日(神兵)

山がむかひあふ神兵ここに天降る

戦ひの場のふとみなが星の流れ

スマトラ 西垣 碧禪洞

椰子の葉雨あり一日の夕化粧のよな

消燈月に見るわれの兵舎彼の兵舎

ねながらまんま上への空のあり月のあり

東京 木下 葺

風捲いて行く手旗ガツシリと砂嚙む(海兵團)

齒を洗つて葺すつぱりと月しづむ

私の釣床ゆれるまどろみの故郷

層雲壇其一 井泉水選

京都 井上 充夫

展覧會へあたたかな空の川の柳の一本一本
道が師走の家の二階の灯がとどく麥の芽
雪のあとの頬白なく日さして寺と塀ひとへ
ことしのつばめこころ織屋町の轉業した物つみてゆく
土をわつてことしもここに赤い太い芽、空

豊橋 鈴木 折嶺

刺突訓練の假標がならんでめて月夜誰れも通らない
硝子障子も爆風よけ貼つてまだつぼみがかたい梅の木
海苔がかわく海苔の手をかへしてゐる白いにはとり
浮いて雲が春になる少年フープの廻轉
母よ雨が春雨のやうな藁さうりつくつてゐられる

神奈川 瀧山 重三

海、夏みかんの木にあるしづかな雨を窓にしてゐる
しごとがガラス戸の中毎日春がくる風吹いてゐる
鳩、林のひまから海がのぞいて 春だといふ
ほうたんの芽、ゆるされてあるくステッキがある
林の芽をふくひかり夕べは風やんでゐる

福岡 津田 笹彦

峠にかぜがあるにぎりめしのなかのうめぼし
つもるゆきがふつてきて子供たち學校へゆく

みちがあつて梅さく
けふの日のほうが大きい風呂の中
かすんでゐる島のくもつてくるしづかな時間

新潟 金井 三良

一と時あらしがそれから雨の榛の花房しづかにて春
山の體操空の深さへ呼吸して終り雪の山脈が春
枯木霜どけ原つばあさ日さしてくる
うづめて墓は杉の葉の春浅い雨のしづく
春の夕べは屋根から煙が出てゐる妻子へもどり

横濱 東松 八洲雄

月夜の月のない晩は池のうすあかりして降る
堰の猫柳やそこの橋の袂の骨つぎの看板
乏しき中の蝗を着に先生とうちのとしより(井師來訪二)
月の皎々と池のまはりの枯れ枝は櫻か
きのふの雪に日のさすと麥の青さかよ

石川 片岡 樹裏人

ふゆ日透きて冬木林をなし
高浪にのりてでる二三ぞう、とかへるやうす女たち
注射はしていただいてからの深夜のあめのおとである
すこし雪のこりゐて棕櫚の皮はいである家です
海はあをく青い松と空をもつ 鑛泉宿

東京 平松 星童

かぜにはくれんふかれつつきよげ
顔の白さ、夜の櫻ちつてゐる
竹馬で兄弟で山の雪晴れてまぶしい

風から祭りが耳のとほいおぼあさんと猫
雪ふるまつしろなこどもまつしろな犬

東京 橋本 淳一

木の橋をわたり残置燈に春の雪つもる
柳の芽が銀座裏の小さな個展の入口
芽ぶいた水にゐるあめんぼうと子ども
花ぐもりの歩哨は松の木の下にみゆ
桃の花毬が毬つく手にもどつてくる子

濱松 細谷 野 落

畑の中桃さく海のうへのふね
子供たちも居り椿の花待避壕あたたかし
ひとつぶ一粒土にうづめ日が長うなつた
軍艦のをる海をまへ眼鏡をふく
父の云ふた叱言子に云ふてこんにち南瓜種まく

東京 淨心寺 惇

お宮の日の丸は出征があるらしい冬田朝日
芽ぶく木の中アパアトみんなふさがつてゐる
梅の蕾私がいっつの間にか年寄仲間
橋を通る車は疎開の荷物ばかり春の雲
霜の家のそばの溝家鴨はいつも三羽で居る

銚子 名 雪 理 輝

海は見えない海の方月はいざよひの雲をぬぐ
あひるが、寒さも彼岸すぎてるさざなみ
燈臺へ白浪が秋女の繪かきさん
待避壕の芝のところどころ芽ぐみ雨ふつてゐる

岩が氷りつめて晝からは陽がさしてくる

註〇〇 加藤 裸 秋

麥の芽しもどけみな面會人で馬車でゆく
みちしるべではない看的ぬくい日あたつてゐた
三つ四つ剣突藁棒である早春の不二である
松にふる雨杉にふる雨春になつてよくふる雨
雪照る道が通つてゐる營内月の夜

福岡 品川 幸一郎

夜るがぬるんでゐる本屋の灯は小暗らくて人の通り
木の芽がぬれてゐる月が出てゐる
さくららふくらんでゐる圖書館のぴらぴらするかあてん
むつきはれざまや島がみえてゐる麥の芽
春は白い雲パスが木の中を通る

栃木 植田 市 籠

氷つた下水が流れる春の音の東京へゆく高壓線
雪が解ける軒並の一軒が時うたしてゐる時計屋
ふたりが一本の傘にポストに春の浪よせてゐる
もんぺで撮つた寫眞に母が氣にいつて花が咲くと

長崎 森 久樹 男

●ども柿をたべたべ行きふりかへり夕日の信者まち
港が青い傷兵さん松葉杖で果物屋の前
竹にかへたばかりの髓を春になる雨
日のすうつとのびてきた梅の花のしべ、ゆうびん

大阪 南川 鴻 亮

池は氷に朝日さして来て子供らの聲

麥青々と風ふくお百姓さん吹かれてゐる
春行く雲として雨はあがるらしい爆音です
寒さもどうやらこれまでの昏くなつても梅の白く

熊本 木庭 皓龍子

郵便局の隣産業組合晝は静かな桃咲いてゐる
朝日の樹の影が電車道横ぎつてゐる品川彌次郎が考へてゐる
菜の花に蝶々戻りが九州となつてゐる
阿蘇は雨になつて宿の玉子のはずに切つたの

熊本 白石 黙忍禱

あひにゆくこの汽車發車時間、發車する
陽のさして山の肌も二ヶ月一日
母校の櫻ももう老木の今年には遅いらしい芽
春 雷 沈 丁 花 の 花 降 り つ め る

鳥取 重村 百堂

車中城が見えると名古屋になる空が二ヶ月
但馬の山の雪の汽車で行く月の夜
窓に枝に雪の見えて壯行會の辭校長先生
供出の活字出してしまふとしみじみ春が日當る

東京 淺井 冠二

雀子すずめつれてきて軒の雪がしづく
春は日くれても白い花咲いてゐて散つてゐて
君も疎開の一人の、十年住みついたといふ萬年青の實で
花 に ふ る 雪 の 消 え ず ふ る

東京 落窪 京太郎

萩はまだ青葉のなごりと云つた風なこのごろ曇り

さるすべりは九月がさかりこの道十年行きも歸りもする
アメンボを覺へた子と少し大きい子と秋の雲流れてゐる
ひつそり草のかげをうつしてそのまま月夜にする

横濱 青木 青夫

句を拾はうにも冬の木、紙屑拾つてゐるものよ
川底干あがりて氷雨ふるジャンクにも
海が見えて崖道行くと椿の咲きかけてゐる朝
四五輪梅さく空から霞たばしるといふやうな

岡山 近藤 次良

墓の前に来て重い荷おろしたる夕べの空
道の明るく更に明るくなつてゆく道の松の葉
うぐひす啼く朝のほうれん草の汁をすすりつつきく
戻りみちは解けてぬかるみあるいて戻る

東京 原 農平

春の、土に種ふせたの畑け花ぐもり
乳牛うづくまつて乳ぶさべつたり夕陽が春
さくにまのあるさくら老ひ木のわらや日あたり
東京をはなれて昔の木芽ふいてくるは八紘塾けやきの木

東京 岡野 宵火

この頃はだれもする防空服装で娘さん、の靴の霜どけ
雑木の冬が終る木の中をぬけてゐる路
雑木の朝をくる人雪となる頬かむりして
風が吹いてばかり、木がこまかな葉を出してゐる

愛媛 佐伯 美則

うらうら豆のはぜる音の晝も寝てゐる

川、口には橋のその上に水平線が早春
松の林の透けて春汽車の行く方へ船が行く
谷間の雪のとけて流るる岩をかみて白し

静岡 佐藤 専子

菜の花生けてある軍事郵便一枚来てある
すぐ沈む三日月の菜の花にほつてある
戦線も今夜三日月か皇土春宵静穩

平壤 加藤 運兒

働け働けと煙突からむくむくと煙が朝の朝日
月を見ながら歩きながら次男も征きました話
鑛山の煙が夕日になると家の青い煙で
棉の木に雪棉の木に綿ついとつて

三重 小松 途從

南より射す日家々海苔干してある
はれて日のさして梅のまんかい
杉の木立が春の花咲かせてある
うぐひすも三日見ぬ間の藪のさくらか

鳥取 井上 有紀男

庇のさくらの枝に日ざしが寒い日の蝶の串
高原早春の枯色の中すでに芽ぶくものあがる斜面平面
土に親しむひまに馬に乗るさくらが二三本
麥のみどり早春のあめがやんである雞がある

栃木 日向 野秀策

はなぐもりが雨になり鐵削つてあるひるのでんき
木造船雨たまるほど降つて梅の花びら

もう雲雀の、空の煙突で仕事してある
薬師堂の屋根もくれん雨あかるく霽れる

栃木 栃本よし雄

雪がちらちらと水平線におちてあるかうもりの柄をもつ
母艦へ歸つてゆく水兵さんとして、雪に月さすところ
山を消してしまつた雪がドツクの鐵骨にふぶくさまか
みゆきとなりこどもたぬしく障子にかけあしてある

石川 高崎 貞之

いく日ぶりの日ざしが障子障子のうち
日をいれて月がまだ出ないほどの山のみつらみ
屋根から冬木があかるい月夜になる
漕いでほたる漕いで川はばがひろくなる

濱松 伊藤 雅章

鴉まつくろいからだを鳴くに暗くなる
雨音には春を感じてある厨の夜の皿洗ふ音
鳩が地にをると春が歩いてくる
草餅を好みながらへしおもひのしみじみ

東京 角田 重信

たばこの火たばこにうつしてもらつて一つ二つの星
機械が止まつて晝の雪とけてある、おと
冬木に春、白い醫院があつて公園入口

仙臺 芦立 陶抄子

咲いてささなみうつつてある
鶯、朝をはくのが床やさんそのとなり駐在所
ひとひらふたひらひらひらひがさ

大阪 三浦 香女

ちらちらしたものの青空が出て青木の實の赤いのも
ひらうた旬は、柴はたばねて下りる
からたちの花に雨はれた空の爆音

朝鮮 山本 木天蓼

旅は枯野焼く火の夕方になりて赤き
渡し舟ついてずつと干潟になつてゐて春な
春の夕月のほふものの温泉こぼれてゐるらしき

長野 前田 若水

防空看視所の松の木が多へ確かな位置
雞めがついてゆくので老いてゐられる
春の風となつてゐる薬を打つ

駐滿 草山 貞胤

雪に月が誰か吹く柳笛
星が枯木チャラメラ街が公園になるところ
雪に陽が出た風の中の桃が一本

三重 親井 牽牛花

日ざななか田にかげ寒いかげ枯木
眺めくまなしあらうみや多なみ
假泊の星のうるみ春ちかき

東京 夏畑 望子

ほうれん草いただいて日ぐれ前の青さの
雪に木の影日のさすとゆれる
唐さんの縞鼻緒にすげてもう草もえる

富山 島山 雪灯

日のつめたい機關車のいき

驚は白し雪のなくなつた田圃朝の日
七つ星春めくそれからそれぞれの星座も町の上

北支 山本 耕生

小鳥を射て小鳥の飛んでいつた屋根、空
残し置かう本の中から本をとりあげたり
濡れた木に小鳥がきて啼くほどの春雨

静岡 澤木 正

風のなかの麥の芽が大分のびた日のおちるとき
麥の芽のあをく線路をぬらしてゐる雨
と三日月があつてうめの花、かぜやんだので

福岡 原 實

枝にくつついた櫛の實の嵐である
日の出前の牛ひいてゆく途の一すぢ、霜
母の日は茶の花が咲き山茶花が咲き

駐〇〇 遠藤 虹水

かまくらは松の多くて冬の夕べの松の間の家いへ
鳥に青いものなど二階住るは松の木に朝日さしてくる
白羽の矢を持つてくるひとなど元日の朝すこしくもり

沼津 内久 根聖巳

道をきいて橋を渡つて遠山晴れた道ゆく
月夜の竹藪に梅咲いてゐてあかるい
多雲ポカポカと音乗合馬車は港までゆく

朝鮮 本多 閑麗

流るる水もお天気つづきの櫻で散るは

梅が散り子供の下駄の繪もほんたうにあたたかくなる
川かぜは花曇りのかはぶね

埼玉 井上 紅嵐

身邊に迫るものを静かに机一月號青葉町だより
茶ばかりの茶店でよろし梅も遠からず
鴉のかへる夕日の麥てくてく踏むでゐる

石川 太平 成正

暮れると星が出て雪が積つてゐる
學童藁を持ち雪の道學校へ行く
菜の花も夕べとなりし影が月影

島根 佐々木 行人

小鳥今年もぶつきらぼうの枯枝にきて二月
雪解かがやく家うちしづけさ
稲はぜ稲はぜ御遺骨の通りしそのあと

兵庫 岡田 琅玕

雲あしからあめがふる寒い石だん
道をゆき今年の雲雀橋を渡り今年の燕勤めて戻る
散つたあとの雨があがつてゐる落日

愛媛 村瀬 汀 火骨

大霜の日の出まへ
降りやむと雪の月夜の小舟にて
海が入江になつてこの丘梅がまんかい

横濱 新納 香樹

耳とり風が吹いて電車が工場へ走つてゆく朝
梅の咲いた池の朝は中學生影して通り

梅の花が白い提灯で送つてくださる

東京 村田 藤庵

蜷舟とみれば湖が瀬田川である雨
ふつくらと森が雨の河原へ傘さして出る

弘前 竹内 竹童

春をほたほた降る雪の、水に灯がならんでる
降つては消える雪の大日様への橋

兵庫 磯崎 雄一

汽笛が出てゆくと春の夜の、湖の一つの灯になつてしまふ
ひるは白い雲のよるとなりて降る雨の、さくら

大阪 青 應 香

梅咲いてゐる人が出て耕してゐる
ぞくぞく芽が出るのへ土砂降り

秋田 照井 燈光

日が照つたりするとはとり、と影もほぼたく春
ふりむいても雪がふつてゐるだけの一本橋

長野 關口 江畔

ゆくに静かな春の木の影の木の中
老いて梅の木ことしも咲いた

新潟 小原 甲陵

ドヤドヤと風が吹く三月の雪嵩工場地帯
輕便鐵道がときどきまだ雪少し落のたう

福井 森田 十雨

泊り客立たれてからはあたたかくて一輪二輪
征く身となれば送られる新雪を踏んでゆく

雪のやむと鯉に日ざしがほんのりと春
雪夜のとはい瀬音の産着縫うてゐる

駐〇〇 目黒 亮 助

冬木切通し坂日ざしは春の影ゆつくりのぼり
星すこしうるみたるひかり庭の木の空

東京 伊澤 元美

冬はさつぱり客のないことなど、その池の鯉
罪のないないうそ、の、冬

佐賀 山鹿 玲 瓏 子

梅咲くと日暮れの豆腐屋で買ひにきたので
壺の花に日の入る春夕べ、海が鳴つてゐる

平塚 青木 美 岐 雄

皇土既に戦場既に春萌えむとす
梅に氷雨す敵撃滅の初雷と思ふ

川崎 北田 千 秋 子

もとゐた家の紅梅ふくらんでゐるかな
朝の冬木と富士、えんとつは遠くにもある

横須賀 長島 夕 汀 子

風が吹く一日 麥の芽青し
地に這ふばかりの梅の枝に花月夜になる

東京 三 輪 薫

小さな電車が兵舎のずつと向う湯の街雪ぞら
晝から水雪となつてお彼岸の炬燵の干柿

長野 川久 保 天 狼

練習機低く飛んで柿の木のかきのへたの霜
村の子の中疎開の子も来てゐてふきのとう

熊本、石 原 元 寛

鳥船がすわつてゐる
鳥のひとむらは芝居幟などたてて冬波の海を前

兵庫 平 井 青 水

一日をふぶき今日戦死公報
ささを吹く風の月が眞夜中

埼玉 横 関 碧 樓

床屋の鏡通りがうつり犬も通り萬才も通り
お彼岸の花にも税がついて今年閏年まだ寒い

秋田 増 村 辰 郎

既の日當つてゐる馬の顔今日としこえまつり
草の芽あたたかし心に秘めてゆく

秋田 石 黒 健 次

たかいところ雪おろしてゐる通り雪ちらつてゐる
たばこはきざみにしてゐるりあたたかい

廣島 渡 邊 ソウ

ここも竹垣にかへてゐる梅や椿や
花粉をけむらす杉の木が日を入れる山をまへ

東京 窪 田 三 洞

静岡 遠 藤 源 治

秋田 佐々木 味 化

長野 川 上 湧 泉

神戸 田中 井夢

山でことりのこゑあたたかなくてあめ土産物
花のほふその花さむくはなくして月夜
山の子麥の芽だんだんばたけのあさ學校へくる
さくらさくまへさむくてあめのふる溝川
そとへでて早春の野へでるみち
井戸からくんでたにし籠に採ってきたはだしで
漕いですこしいつて海の岩、蝶がゐる
てふてふうちよりそとがあたたかい水平線

東京 佐藤 康治

正午になると四角なめし、轉業
征つてからも二三度降つてとけてけふも雪の、郵便素通りする

ぬれた橋春のあめ降る
そちこち疎開する話も床屋の鏡に梅の、梅の咲く話
花が床屋にあるのを工場へ毎朝
辨當もつて出てゆくことにも此頃うすい霜おく橋が春
ごはんのたんびお前の箸も箸立に、私たち無事櫻も咲く

岐阜 水谷 青杜

日々爆音日々快方春は風がひるからになるとでる
止むことは止んだものの木の芽晴れるでもなく船の笛
この家昔からの黒い大黒柱、主人として歸つてきてゐる
魚の飛ぶを、腰かけてみてゐる春
水に水すましよしの芽
竹林があつて池、池にまつたく雲がない
ひる月、桃の花がこぼれてきた

層雲壇其二

井泉水選

福岡 鹿谷 皓樹

うぐひす、朝の林が池にうつつてゐる
あめふる林をとほつて春淺し林へゆくみち
いなづまするとききのあめ芭蕉の葉
車庫に電車がゐるプラタン桐の木ふゆのあめ
梅はまんかいのおみくじ箱

山形 佐藤 逸仙子

積載制限が立ててある橋を静かに積る雪
灯り早い小雪がちらついたりして本日賣切申候
事務所のボンボン時計も春近き貯水池をまへ
冬瓜芽をもちて陣中開あり(中支にて)
木が木ときほひ流るる水のたぎりゆく春(大井川流水)

名古屋 長谷川 敏郎

送電塔には浮雲の白さと春風がすこし
竹原なびけ吹く風へ吹かれてゆくのも
山のまへの山の低くてうめ咲いてゐる
春はさざなみ、朝はあるいて憩んでゐる
旅は梅さきさらさら水の流れてゐるところ

駐〇〇 石川 舟洋

白く六甲山晴れて衛兵所のあたり雀來てゐる
雨の傘さしてゆく道が松並木

どの屋根にも雪があつてとまると大垣、又出て行く
家が一二軒あつて梅は紅梅湖がひつそり
女ばかりのくらしとなつて梅の花が月夜(父逝く)

東京 伊東 光子

坊や大きな聲で泣き春が戦争の空が毎日爆音
春は明けたばかりの厨へガスのほのほのうすむらさき
炭ぎきてひととせの、京菜さくさくきざんである
久しぶりに針をもつて青い明るい雨がひすがら
雨が春の雨のけふはお湯がある風呂屋のけむり

満洲 清水 たかを

白茶ばいさいと賣る聲の道とけてぐる
雪はれの渡しの雪の舟に乗る人たちにまわり
星夜星降るましろきお骨の壺、頭べあげえず
山をまはると鹽田の潮の白くよせてくるところ
右にも海を左にも海を青バス青空たんたん

廣島 菅 英二郎

大陸へお嫁にゆきまます櫻みてゆきまます
とぶからすなくからす土にゐてもをほるからす
久しぶりに一本足の乞食がきて梅咲く
梅がみんな元氣な便りの満開
三寶に歸依し蟬しぐれに來てある

愛媛 武田 桂

春近い雨がしづかに降つてある笹むらと川
山ひだ陽の照り陽のかげり冬が暮れてしまふ
卒業式とても海ゆかばうたふて歸る少女たち麥が青く

池に輪をたくさんかく雨白い桃咲く
赤いぼけ白いぼけ檜の木も春になつてある

濠北 新村 和也

積荷終つて一寸いづつとつた港の青い山々
月夜のポンカン食べます兵隊くるま座
月の光は人の出はいりする扉
灯せば月夜の船

熊本 小島 草人

毀れた肺と二月の空と椿がふくらんである
みちばたふきのとが青い上着ぬいである
うぐひす、杉の林相梢一せいにのびんとす
雨をもどり雨の音の外は梅の花の咲く晩

駐〇〇 廣田 不知火

麥の芽、この頃おだやかな阿蘇の煙で
凧のうなりをしかともちその凧のいさみやうも
ふきのたる庭下駄で還つてをられる(紫陽花氏)
汽車のふえの音勉強が遅々として更けてある

千葉 關根 ふさこ

雨上つたけむ出し煙出して春になる
毎日達者で働ける毎朝梅のつぼみ
ざるの三つ葉に日のさして静かな厨の時間です
みんなで読んでなんども読んで葉書一まい

四平街 萩原 和夫

月夜は月夜のあしおとが聲かけて通る

ふる里にする便りをポストがかん月に口あいてゐる
敵前朝が待たれる明け方の白い花になる
菜の花月夜は日本と同じ蛙でないてゐる

東京 印南 健二

床屋さんのカナリヤいい聲で春の雨はれさう
雨はれのここらまでも観音さまの鳩が浅春
芽ぐむむ枝のむのむし

東京 作間比露詩

見るかぎり雪、一列の貨車を入れかへて来る
風に體操してゐるとある屋上冬晴
郵便屋さん一日に一度は通る満開の梅

駐〇〇 中村和たる

風に暮れて何時までたつても遠い軍歌で
汽車がするすると通つたその山あらまし暮れ
おぼろに島であるといふ窓のスイートビイ

山口 藤井鳴木兎

若い母でその子と放送局の住宅の冬木とアンテナ
日直の女先生赤いコート着て小川は雪解水一ぱい
太陽と豆の花とひらひらてふてふとひと時

神戸 高柳 登一

冬のぶどう畑は山から一本道細い通つてゐる
尋ねて次の電車が四十分菜畑耕してゐる
故郷は雪どけともかくもお墓に詣る

長野 高橋 松二

雪に朝月の木のかげが寒明けてゐる

雪が雨だれして寒あけの郵便受箱
來てゐてほほじろの杉の木の手鳴く

岡山 岡田 花野

竹の雪落ちる日のさし人の通る
椿一りんざし、一日あかるくて降る
おん僧佛へ灯す頃の木蓮は白く

岡山 赤松 甲庵

麥田に降る雪の道がもう白うたてよこ
二月雪ふる松の葉に降る
軒の大根に朝の日さしつきうすふんでゐる

群馬 鶴淵 螢光

種胡瓜も色づいて戦地の父からたより
もう雪の來て赤城の山それにつづく古里山々
尼さんうつくしく紫陽花に雨の降る

東京 高橋 燕佛

富士ももう白い朝のマスク
雲が電柱に連つてゐる冬くれかかつてゐる
山へ家一つある道が晴

吹田 多胡比左志

妻の歸る頃のしきりに足音が暮れてゐる
傘の雪子を入れて風呂へ行く
梅日和の又曇つて來て濡れてゐる薪

東京 龜谷 庭草

月夜が水におちる水音の月夜となる
大雪ふつてはれた雫のおとの病人は安靜

香房麗日窓をあけて坐り

長野 栗田 白夢

みんな芽ぶく雨の川にかけてあるつりばし
高い窓から明りがとどいてゐる土間の藁打石
雪山斑の月夜となりて木の立ち

兵庫 竹内 孤明

あらればらばら石がすわつてゐる
春になる雨が橋の上一人二人ぬれて通る
娘さん自轉車でこのへん麥は發育よろし

和歌山 梶本 芦城

牡丹雪になり病めばしづかな晝になる
くわへてきた藁は、屋根瓦あたたかく
働いてみんながかへる時の雪の残つてゐる山

兵庫 田原 蘆人

まるい月の出で蒲團着てねた東山汽車にのる
よべ竹林とおぼえしその竹林の朝のみちをゆく
すすする白粥のあかときとなる(臘八)

福井 吉村 しをり

雪山雜木みそさざい鳴けば晴れてゐる
枯草原の淡雪、土筆、犬を連れてゐる
梅干し壺に味噌つぼの並んでゐる厨が早春

東京 武田 悠兒

バスが後から冬の陽あたたかな丘へ登つてゆく道
窓が昏れてゆく一と時縫ひ物をする看護婦さん
雨の日は水をつめたくて洗面所のガラスに青い葉

秋田 下總 磁郎

インパールタムなどといふをととひの新開山の床屋さん
しんと散つてゐるのが月夜のこぶしの花
細なんがい村の栗ばたけの栗の穂の雨

東京 里井 正子

なぐさめにきてごまの實はせてゐる
のみの音やむとひるにしてゐる椿おちてゐる
お風呂屋さん廢業して椿ほつと咲いてゐる

東京 針生 惠代

ほかほか黒い土は芽ぐみ我等祖國といふものを
きれいな星とお風呂が燃えてゐる火で

臺灣 根田 月子

ラジオは前線への夕、夕餉のあとの流しの水で
けふは征つた人の洗濯物の二つ三つ春の小鳥

福井 助田 小芳

春の雨に傘さして買出しといつたやうな
さくらの枝はまだ蕾の、晴れてさざなみ

東京 大山 冬石

寒さもだいぶん日の延びてきたはねつるべ
それから散る葉の生活にもなれて柿の木

大阪 菅崎 道雄

やがて春のくることを、雪降れば雪を見てゐる(病中)
月あかりではなくて雪明りの、降りに降る
雪ふれば陽のさせば夏みかんばたけの夏みかん

三重 野呂 三千

このへん水に芹の青さを口笛でくる

東京 松田 勇

朝鮮 戸澤 正一

毎日見て通る大本營の無電塔たくましく夏
夕かげはるかに宮城のみどりの實にしづかな

吳 入江 孤燈 人

夜もとけてはるのしづくになるおと
三月のまた雪となり峠から来る終バスであり

福井 桑原 愚村

奈良は早春のみたらしも二月堂三月堂
樹々がしづくするこの雨あたたかくなる雨

大阪 今井 一秋

禱り了へて帽子掛ける釘が上向いてゐる
兩手は兩膝に置き遠い花の見える

東京 鈴木 單衣 女

林を出ると冬の芒原雲の迅し
まち針をつけておいてこの世にはゐない

長野 栗田 千可志

春風の時計塔の針は動かないで卒業してしまふ
竹がきざつと白い雪ふるいちにち

埼玉 井上 暉 一郎

障子の日ざしが今日は誰もこない練炭赤い
朝はれたそらからす二羽ないてゆく

東京 中村 正明

讀みて普門品寫して普門品木の枝の春の日
静かな雨がふつてゐる 麥の芽

南方 眞行 寺 理

朝は松の花粉が青い掃いてゐる
蛙あめふればつばめふりやめば空

岐阜 間宮 折鶴 子

芭蕉の葉に赤道の空が飛行基地十三時
木の芽合えもスコールのあとの涼しいふも

岩國 山川 白朝

風が林のなかの松の木白い足袋でくる人
大きな字の番傘で虹がぬれてゐるのを

豊橋 山本 惠史

櫻が咲きさうな汗ふいて畑
お宮があつてをがんで櫻

東京 栗澤 淡々

この道毎日行つて戻つて工場の塀のびわの花
あめふるつばきの花がお寺のうらみち

熊本 濱田 焯 一

今朝はサラリと雪のあつて二ヶ月青ぞら
冬の日の汗ばむ程な少女たちけふ勤勞奉仕

岐阜 水谷 みな

日のかげると切通し坂道犬さきへさきへゆく
櫻も散つたことが病室の寒暖計が寒くなる

名古屋 杉本 幸一

酒蔵酒樽に冬の日一ぱいな山のかたち

川崎 北田 大林木

大阪 梁瀬 阿羅 與

朝もや暖く晴れると畑は青し

梅の木花さいて朝の體操してゐるみんな戰士たち

東京 安田 爐中 火

東京 折居 遙子

空の時計の顔と芽ぶいた木がかげするところ

何となくよれば好い本があつて好い日の空

熊本 吉岡 千草

石川 太平 直正

石炭節約のポスターがガラスの外みぞれてゐる

征く人送る人と春の日の池に出た

長野 八重田 保 朗

東京 兩角 良哉

牡丹雪ふるる吊橋渡る

未だに寒い戦況も身にしみてゲートルいつも持つてゐる

平塚 吉田 富雄

長野 武藤 林三郎

交通整理に聲からしてゐて春が日暮れ

信濃も青陽の春の水春の水に入り

千葉 安瀬 和夫

京都 高橋 又兵衛

ポプラの先にかかつた凧が芽ぶいてゐる

大いなる雲の春の山に光、影してゐる

東京 水谷 清照

東京 堀切 赤框

霜焼けの手がかゆい程な陽が春になつたらジオで

浪が巖を打つ春風の此海のかなた

岐阜 森本 晴雄

長崎 沖田 月聲

もう春がくる唄ふ子がポストまでゆく

月の夜の明るさは梅の花まんかい

東京 水谷 暢亮

大阪 三好 なつを

机において召集令状美しい星が出てゐる

働いて海に星の出てる戻る

香川 比地 三平

名古屋 星野 明

流れが曲つてくるところ草に菅笠おいてある

梅の咲くと銃後は牛の仕事の牛のなく

京城 廣保 麥秋

駐〇〇 上野 葭生

雲に聳ゆる高千穂の歌けふの青空街の夢

陽ざしの冬が春になる病棟の屋根の傾斜

岐阜 肥田 興顯

千葉 福本 逸子

をかにはをかほ濱には鱒あがつた聲で

ここにも露のとお墓に花たててゐる

大連 二神 布佐女

屋根をこえて白いてふてふ春蘭のつぼみ

東京 仁木美津子

京都 市川 秋 啼
水平線に動いてゐる軍艦らしく波が雨

けふも無事であつたことの火鉢のまろさあたたかし

長野 西牧一餘子

三重 中 川 保
雪とける木の影が落ちてゐる

戦さの苛烈を軒の乾燥野菜各日いつばい

東京 仁木 堅二

平壤 山田 幸雄
軍歌をきいて寢入つた子の父として春夜

ころころころがりさうな石がぬくとい返をおりる

長野 酒井 健之

横須賀 矢 島 三 寒
雲をうつしてゐる水たまりが道のあちらにこちらに

わら家雪の白くねてゐる

秋田 菅原 裸歩

静岡 北 村 潤
笑ひながら来て女學生たち青い池のさざなみ

雨がぬれてゐる木の橋郵便屋さんくる

福岡 下 田 麥

新京 滑 川 潔 子
父のない子となつておとなしくて此頃畑の青いもの

もう麥の穂のお百姓さん鳥もゐて

岐阜 鈴 木 綾子

大阪 中野小彌太
道が橋へ橋から道が風が黄色い

道にふる雨の買つた花もちてかへる

福岡 古賀サダメ

東京 成 川 子 柳
子供ら木の下の道山の空くらくなる

野の草霜がとける馬が通る

北海道 市川ゆきを

栃木 鹽 田 正 吾
ふるさとは氏神さまへ道のふきのたう

うんと働いて芽ぶいていつお召しがきてもよい

佐 渡 五十地 皓一郎

東京 高 橋 耕 吉
その家も疎開したといふ雨ふりつづきの屋根の瓦

焼跡少し離れた青い木の下自轉車おいてある

函 館 石 井 清

大阪 谷 雨 滴
夜も裏で薪割る音が月夜が春とて

雪がよごれてゐる春野菜配給しらせてくる

新潟 野 口 登 一

東京 時 岡 武 男
つめたい朝のしづかな機械が見えてゐるガラス

炭やく煙あれば人を焼く煙青い山

新潟 野 口 登 一

東京 鈴 木 水 帆
つめたい朝のしづかな機械が見えてゐるガラス

よくやけた目刺子の白い歯が夜の灯

横濱 近藤 眞佐夫

灯りは早く消して病室の花の匂ふしづかな

大阪 佐藤 龍

散つて月が照らしてゐる石

釜山 辻 尹子

つめの白さは病んでゐてぼけ一輪もつ

和歌山 對馬 幸二

爆音は樺色の練習機である障子はあけてある

廣島 門藤 康生

黄色い花があるもんぺの娘さんたち通る

栃木 小林 泉次郎

卷尾の犬が林のみち枝の葉の風

滋賀 川口 翠呼

よう遠つたといつてくれるお婆さんの目が春風のやうな

朝鮮 遠藤 泉

暮れても屋根の上の旗にまゐる月が出た

熊本 高木 母子草

しつとりしたこの土に今年はいもを植ゑてゐる

東京 松倉 重藏

春が半分かけた月が公園の残置燈の空

横須賀 瀬戸 菊陽

その星ふるさとを指してゐる退けてくる道

長野 阿部 まこと

供出の櫛の樹を倒した空の北斗の星、春

句 蓆

□海紅東京句會四月句座

ラツパ一隊四月の天を向いて吹く
 葉櫻に相遇ふかれの戦闘帽
 どこも陽炎が立つ航空兵たらむ我等
 いちねんかなりや巢にをり屋根の傾斜が見える
 南瓜畑の地ごしらへと鯉を入れた池と決戦来る庭
 夜番がすんだ僕たち無花果は冬木なり
 鳩がついばむ土雨が降つた浅春
 列伍全體にある肩はば木立を行きて春日
 つんつん杉菜のトロツコを押す
 しどみの花あり若い牝馬を弟引いてくる
 あさつき雪の中からとつてきた一人のこども
 藪の隅つこぐみの花にさし込む夕日
 天窓を高く酒ありて爐ばた
 隣人と朝の一撈胡瓜苗手柴欲りすに
 理屈屋不喚居士椿を好み或る日
 韭ひとにぎりくれる隣人小さき手
 蓬生ふる地にたつ人をたくましと見る
 この夜お茶いっぶくのむに感じ草の芽
 家に深い廂菜種の花と僕と
 國のどこかに天佑人々の畑いつせいに芽ぐみ
 春雪の白さこんな朝家に女の子うまれ
 摘草のわが籠雨雲が来る

釜村
青起
章一
晚甘
晴星
羽六
健二
眞魚
多加士
金次
十中花
寒骨
羽双
六花
美雄
不句
涓二
一思
鷺水城
六石
洋吉郎
一碧樓

句評

晚甘、晴星、十中花、美雄、櫻礮子、一碧樓

擬装をとく枯草がにほひがする軀 (銳雄)

【晚甘】 所謂戦争俳句も數多く見るが、この句には肅然として襟を正すものがある。作者が醜の御楯として、あらゆる苦難を忍びつゝ一路聖戦に従つて居られるガツシリとした體軀が偲ばれる。然も作者はただ枯草の匂ひが軀にするといふ丈で、この苦難を少しも苦難としてゐない、まことに尊い心境であつて、これこそ日本國民の眞の姿と云ひ度い。

「枯草の」といはず「枯草が」とした事も味ふべきであり大に賛成である。

【晴星】 ふるさと遠く來て居る極寒零下四十度の北滿の曠野に戦ふ感懐がよく表はされてゐる。如何にも軍務に服して生れたほんとうの句である。

「枯草がにほひがする」といふ表現も「枯草がにほふ」より此場合適切に訴へて來る。そして枯草がにほひがする生身を感じたところ實にいふ。

【十中花】 擬装を解いた瞬間の感じとして、これは誠の聲である。あるがまゝの枯草と、枯草のにほひがする軀があるがまゝに感じ現はした境地は尊い。表現上「枯草がにほひがする軀」は言葉を省略して、それが反つて非常に効果的な響きをもたらししてゐる。

【美雄】 「枯草がにほひがする軀」技巧といふか無技巧といふか至妙の表現、これは身を以つて體驗するものでない限り、作らうとして作れ

るものではないと思ふ。「枯草が」そしてそればかりではない、何か異臭が、草のにほひが、軀の臭ひが、硝煙のにほひが、まぎ／＼と感じられる。

【櫻礮子】 枯草がと言ひ、又にほひがと「が」を重ねて驅使して居るところ、強引に粘り過ぎて居るやうであつて、實は此の「が」の重復は、此の場合の作者の實踐感といふものを嚴肅に投影した詞となつて居る。「匂ひがする軀」と止めを刺したやうに言ひ切つた調子も、自然にも生活にも並々ならぬ感受性の鋭さを示して居ると言つてよい。

【一碧樓】 作者は北滿の野に、所謂「北の護り」についてゐる勇士である。今、作戦から歸つて來た處でもあらうか、身體や帽子などに着けてゐる擬装の枯草を取り除く。その枯草の匂ひが如何にもはつきりと感じられ、その匂ひの自分の軀がはつきりと感じられたのである。此句が僕たちにぐつと應へて來るのは、作者が此時「軀」を感じてゐる所から來るのであらうと思へる。

一句しづかなる中に作者の毅然たる心持が感じられ、自然と頭の下るを覺えるのである。

春雪 ふり 曉 に子供雪を手にして (巢州)

【晚甘】 これはまた情趣ゆたかな一句である。ただの雪でなくて春雪であることが大によい。何でもなない様な句であるが、何かしら一種の新鮮さと聰明が感じられる句である。慾をいへば「曉」は少し際どいやうである。朝くらゐであり度いものだと思ふ。

【晴星】 明るく清らかである。暫く雪に遠ざかつてゐて思はぬ明方に積つた春雪は子供ならずとも嬉しいが、子供は起きぬけに飛び出して雪を擱んで喜んでゐる。それは大人の喜びでもある。たゞ此句「曉に」

は清新な氣もするが稍げばくしい。穩かに「朝とく」位の方がいゝやうに思ふ。

【十中花】 無難ではあるが、格別推賞するほどではない。然し讀んだ後に何かあたゝかい味が残る。

【美雄】 坊主今朝はそんなにはやくいきなりおもてへ飛び出した。いつもは決してそんなではない。「ご飯ですよ」を何遍も云はれてやつと仕方なくと云つた格好が毎日の行狀。その邊で他の子供の聲もするやうだ、さうだ雪が降つてゐるのだ。この句「曉に」が少々利きすぎているやうだがどんなものか。

【櫻魂子】 作者と共に春の雪ふる事に、曉である事に、暖い感情をほのくと呼吸する一句である。子供が雪を丸めたとも握つたとも言はず、「手にして」と叙したところも、春の穩かさを愉しむ心が十分に享け入れられる。

【一碧樓】 情趣のすぐれた一句である。雪握むとか、雪を握るとか云ふ事でなく、たゞに「雪を手にして」と表はした所に、作者が其子供に對する情味が感じられて来る。これは妙味ある表現と云ふべきであらう。

「曉に」は諸説の通り少々派手に過ぎるやうである。こゝは何とか推敲を要すと思はれる。

極寒 見えてゐる 萱原 ひくく (華芳)

【晚甘】 内容表現渾然とした完璧の句である。極寒の丘に立つて萱原を遠望してゐる作者の姿は、あくまでも澄んでゐる。この境地こそ吾吾が多年培ひ來つたもので、此處に到れば新も古もない不滅の一句だと云ひ度い。

【晴星】 手法確かで間然するところがない。秋田方面での句であらうが私は北滿の極寒風景を思ひ出す。雪のあまり深くなく凍てゝしまつた原にはぼつ／＼枯萱が疎らに立つてゐる。高まりのない低い萱原は何の變化もなくじつと冷え切つてゐる。極寒の大自然の偉力をひしひしと感ぜずにはゐられない。この句は大自然の息吹を傳へてじつと押し來る力を持つてゐる。

【十中花】 極寒に、緊張したものを包藏し、低く構へてゐる萱原の姿は、又作者の姿であるとも云へよう。作品と作者が渾然一體となつて強い精神を含んでゐる。

かゝる精神こそ現在の時代に於て最も必要な戦力を形成するものであると思ふ。

【美雄】 「萱原ひくく」は幾分極付けた感じだが、それでいゝだらう、云はないではをさまらない。

【櫻魂子】 評者は昨秋あたりから、句境の積極性といふべき動向にある華芳君の作品に接する事をたのしみにしてゐるが、此句も無難作に「極寒見えてゐる」など何でもなく叙してありながら、一句の切實さ深さが犇々と感得される。

精進三昧に沈潜して、作句の澄明な空氣を呼吸してゐないと斯うした句は生れて來ない。

【一碧樓】 一句の大いさ、一句の重さといふやうなものが感じられる實に堂々たる作と云ふべきである。

これを句表現の完成と見るよりか寧ろこゝに到達するまでの句境の洗練を觀るべきであらう。一寸の思ひつきや、間に合はせでは斯うした調子は決して出て來ないと思ふ。作者が句道修行の嚴しい心構さへも感じられる。

各家近什

東京 萩原 蘿月

陽を見て死ぬ蟲も春は小蟲
想像がわく木で春はさかんに芽を吹く
陽を拜めといへど草の芽のわずかな陽(去國大二句)
金柑の一つ實取りもせず落ちもせず
三月 佛の寂寞が地に擴がる(彼岸)

福岡 木村 綠平

門の内今夜から月夜になる豆の芽
となりの蜜柑の木の蜜柑うちの蜜柑の木の蜜柑月夜
日あたるところに蒔いておいたところに豆の芽
もみすりももひきもみがら夕日
いのちお役に立たない年齢豆蒔く

兵庫 山田 宗作

雨あたゝか征く日近づく菜の畑
石ころつくしんぼ地の窪みのほとり
げんげ田へ流るゝあふるゝ溝の水
雲冷ゆる溝冷ゆる早春家のほとり

我等が同人、星井、佐藤兩氏の戦死を悼む

英魂、そらに在り山鳩 遠い山の端

兵庫 池田 詩外樓

土筆これだけとれた裏から炬燵にもどり障子破れてゐる

晴れると日の出る山がそこに、その斧の音などを聞く
橋が雪のまちのくれるときの川
もうことしのにほふよもぎを團子に、たべてゐる
木の柿の蒂と梅咲く土藏のかべ

東京 九貫 十中花

辛夷の花を仰ぐ人々われは防空服装で来た
雪ふるとほいとところから来た人の帽子と手籠
木の芽そしていま乗る人を待つ軍馬一頭
積の水こつちへ流れてゐる春の日遊ぶ子供ら
大きな待避壕ある崖の土筆摘むことも

大阪 木戸 夢郎

春とて又大雪の世をあげて言あげせず
しまひ牛の頬撫でて夕焼のまつたく春
糸を通されて針が縫ふ布が白い
しらたまの雪は降りけり祓戸の神に白さく
水取もすんで今日此頃の耳よりの話

下關 近木 黎々火

わが いへの月夜あきらけく入る
石があつて夜が明るくなる
木に雪が昏れてゐるけふ
月が夜の町の暗いよこ通る
あまだれのあたたかい雨である

秋田 池田 亜杜子

山にいのりた、くみんな枯羊齒
背囊淡雪つもるしばらくの姿勢

天、寒さゆゆるみし橋を渡り
みんな職域に屋根屋根に東風吹く

長崎 松尾 敦之

みんなそろうてひとりねねこのなかせつぶん
月に光が夜學もくれおそくなつた田の麥
あたたかいい畑のなりに 蒔く
もう露のとうが陸よりもきもの一枚ぬくい
夜に入つて風がおちたあかぎれの貝ぐすり

東京 安藤 北冠星

みいくさの國土あが住み節日ごと
水槽に金魚を放つ 國旗に祈る
丘ぞひ田ぞひこは野草土筆と時す
戦闘機うなりたちつぐ燦増産穂麥
旗擧 軍歌すホー ム涙父がに

大阪 中原 我樂

みるみる春雪がつむ繋いである筏
道が麥青んでる方は涅槃のみち
田に水があふれさうした浅春の天
工員足高くもどりくる春の満月

東京 上原 晃雨草

車窓、顔、顔、君だ、だ、旗がふられ
みそらはひばりのおにぎり
仕事終つた近道は菜の花の寮の灯の
工場も工場もあかあか灯り蛙
みかがみ凝視じいんとたへられなかつた遺児

鎌倉 井出 台水

紫蘇移植して一休みする北滿洲向日葵は
植木屋も來んで作務のふえたる夏となり
重爆獻納を「明日の二機より今日の二機」と日婦が會し
瓜の負割れ 峽小鳥庭も麥稔る

洛陽占領の報道を聞き

クレブジュースを一息に鯨の味噌煮ある

宮城 佐藤 露江

干海苔に海からの陽が宿屋の裏
春らしい雨となり雨あしが川のおもて
月夜の月が流れに乗ると流れ漫々
朝啼いて夕べ啼いて日が伸びてゐる

京都 風間 榮治郎

雪解けて來し日當りに置かれ縞蘭
早春 春み山にいのり 征く人
産戦けさを粉雪にむかへられ門に入る
山河 春 あしたなり 君少年兵

長野 原 蝦煎子

川瀬に木々の青む家、家に家の入ある
沈丁匂ふ朝は薄曇りの海が白くて
竹のふしぶしも太き朝の波の音する
春の春らしくなり人のゆく道をゆく
竹藪下りて來てそれからのみち春の陽あつてる

京都 酒井 仙醉樓

白い豆腐こはさないでもちあらしの中

ふと兵學校の子のこと日の短かい階段下りる
秋の日日照つて暗くなる窓や椅子
柳あふぐのは私一人で行く橋の秋

兵庫 蓬萊 鶯 郎

戰場近し如月の雲山をはなれず
黒茶碗の艶をおもたく春めく夜
國に正氣あり春潮絶えずうごきて
春鳴遠くはとばぬ積草濡れて居る朝
更に壕を掘る蓬の畦を掘る

三重 原 鈴 華

日々決戦す野の菊咲き地に白く咲き
野菊みだれ石くれへ咲く兵馬つくもと
兵進む東西南北みちてくる寒潮の果
潮その果をおもふ芋粥をすゝり銃後
子と國史ひもとく子の眼の澄んで對く寒空

新潟 小林 銀 汀

雪から葱青々と日のさしお詣りして此日征く
雪つもる肩をこの一本道白うなつて歩く
雪深くして忠魂碑月夜戦うてゐる

東京 米倉 勇 美

麥が微笑む河端の増産隣組
皆な微笑つて野火の茶も沸き晝のお辨當
空襲必至といふ庭が畑になり老鷺に鳴かれる
空守り國護り大洋に海の提督
麥光る國內の怒り神よみそなはせ

東京 中島せい作

飯もすませた暖簾の風が花もさきさう
橋のひらく時間の早春の川のさざなみ
汐にうつる星の船に船のよりそひて春
椿落ちて椿落ちてる道の月夜

東京 細木原青起

樹々の芽一樹眼の前に横たはる
梅の窓に似顔かいてやる坑夫力みてすわる
撰炭場出て来た女らに潤し青ぞら
木に梅の花白し神を拜す坑夫たち
梅一樹に家低くてあり人疎開する

近江 若林 乙 吉

夕雲野に動かず菜畑蕾を持ちし
工場轉換も完遂す冬野はてなし
工場轟くに空地ありそして残雪あり
工場を軍需工場に供出し背景冬の山はつきり
男壕を掘るすこしいびつの壕を掘り冬日

山形 和田 光 利

餅ひのやくるにほひも深雪にあめふる
雪からまつさをい菜を掘りだすとて犬もきてゐる
玉碎せりとききダイナモのうなりのなか
家うらのほし大根もゆきのまへの月の照る

八幡 飯尾 青 城 子

元日も夕日のちよつとちつちやい下駄も揃へてあつて
定型句ならお降りといふ工場のなかのぬれてくる道

木をたほすたつきの仕事始め山に入りて
白い月を残して梅の花畠ンなか
麥ののびる雨のとうめい遠山お寺

大阪 風神 伸一

楠の新葉が匂ふ氏の朝
はつばさわつてく五月の感覚
わが尿の黄いろく音して夜ふく(病床吟)

朝の金魚よく動く病室

養生訓を讀む櫛の葉のつや
兵庫 井手 逸郎

こどもの一日雨のさくらの木がさいてゐる
さくらさいてゐる墓一つ雨ふり出してゐる
橋の向う人住んで家のさいてさくらの見ゆる
夕かげつてさいて學校のさくらお寺のさくらも
雪山を遠く青雲のさくらさいてゐる

東京 高橋 晩甘

少年のころざし村のすかんぼも柿もみな芽吹いた
少女は友だちと約束したことありでてゆく門の雪柳
南へゆきし吾子の靴二三足家にある草芽ぶく
何かじぶんにいひきかせるやう南瓜の種子をまく
地を平らし南瓜のたね蒔くに家の硝子戸

富山 高橋 良太郎

桐の芽ぶきたいラジオ体操をとこをんな
榛の木 風ふいて道かわく
はつきりむめのはなひらきつきあかり

ゆくに月夜となりゆくに野火あと
ゆききえたまるい月でやぶかげしろいゆきで

長野 吉澤 句啞郎

雪が今頃一番嵩高い建國祭の日の丸雪にたつ
猫柳の雪うつして静かに流れてゐる
駐在所も雪圍ひの二階があつて梯子段日のさし
静かに水が紙漉く家に流れことし大雪

名古屋 池原 魚眠洞

雪の解ける音のいい音の二度目の郵便
機どころ機の音とけない氷が晝になる
雪あとぬく雨つづきけふもまだ雨枯枝
海に入る日が竹山の竹松山の松しばらくそめてゐる
晝近く凍てがとけるうどんでもとさがしてあるく

福岡 加藤 迷々可

どぶ泥堆うやる南瓜いきいき根着き
子が馬糞集めて来て道のべ増産の茄子苗
なれぬ杭打つ間遠の響うけて春空
汗しぼり防空壕成るすつきりと薫風
勇士の墓あるへ小鳥来る藤咲きさかり

東京 南 晴星

赤ん坊ふとり家そとのひろさ木蓮つぼみ
遠くへ電話が通じ大雪晴にをる春朝
はこべ家まはりに咲く雨やみし地にをり
撃つて来た土鳩が二羽と話題豊富な男
空に備へる構へあるに立ち水霜のそこら

●三つの雑誌が一つになつたといふ事は「時」といふもののなせるわざである。この「時」は「時勢」でもあり「時代」でもあり「時局」でもある。世の中の事物何一つとして「時」の外には存在しえないのだから、こゝに存在してゐるものの凡てが「時」の制約を受けることは當然である。「時」といふものは大きな、強い流のやうなものだ。で、其流に棹さすか、たゞ流れるか、又は流されるか、或は溺れるか、それが問題だ。とにかく「俳句日本」は一つの船でなくてはならない。船は、しつかとした舵を持たねばならない。帆の上げ方はその時の風次第としても、進むべき方角はしつかりと見定めて進まなくてはならない。

●諺に船頭多くして船山に登る、といふ。「俳句日本」はさういふ物笑ひの例になりたくはない。

●三つの雑誌には、それ／＼持前の主張はあるものの、それが一つになつたといふ事は、小乗的の見を捨てて、大乘的態度に立つたからである。小乗大乘といふことは小さな船には小人敷しか乗らず、大きな船には大人敷が乗るといふことである。「俳句日本」は此の意味から云つても大乘である。同人すべての氣持が、大乘的の襟度立つてやりたいものである。

●大人敷の船にはいろ／＼の氣持の人が乗つてゐる。乗合船といふものは面白いものだとも云へる。「吳越同舟」なぞいふ言葉もあるが、さうした氣持は禁物であらう。

●二つが一つになるよりも、三つが一つになるといふことは難かしい

ものである。世に三角關係といふ言葉もある。「二人三脚」で走るといふこともむづかしい。だが、物は二本の脚では立つことが出来ないけれども、三本の脚ならば、チャンと立つことが出来る。脚立は三本脚で立つ。鼎も亦、三本脚で立つ。だから鼎立といふ言葉もある。「俳句日本」は一つの鼎である。そこで、定型陣の人々から、此の「鼎の輕重」を問はれるやうな、そんな事の無いやうに、したいものである。「陸」は「陸」、「海紅」は「海」、「層雲」は「空」のものであるから「陸」「海」「空」の三軍が提携したものと見れば、如何にも戦時にふさはしい編制ではないか。これを以て、せい／＼すばらしい戦果を挙げたいものである。と云つて、何も敵とするものがあるのではない。我々の戦果といふのは藝術的作品の收穫といふことである。文學界に於ける俳句部門の領域の擴大強化といふことである。

芭蕉二百五十回忌の記念催能「奥の細道」が九段の細川家の舞臺で、五月二十九日に催された。これが芭蕉顯彰行事の最後であつた。空襲必至といふ聲の下でかやうな静かな一時をもつことを得たことは、戦時日本の強きであらう。さて、芭蕉の顯彰も、去年の秋以來かなり多方面に行はれたが、其後に何がもたらされたか、といふ事も考へさせられる。たゞのお祭騒ぎであつたとしては淋しすぎる。芭蕉に關する本が數十種出ただけでは淋しすぎる。私達が俳句の道を進む上で、もう一度芭蕉の精神を顧み、今の己れを反省し、芭蕉の心の「まこと」と芭蕉の藝の「たくましさ」とを我々の句作の魂に取り入れる、といふところに到つてこそ、はじめて、芭蕉二百五十回忌を營むことの意義が生きるのではないか、と思ふ。だが、そこに思ひ及ぼした人が果して幾人あるか、とおもふといかにも淋しい氣持がする。(五月三十一日)

句 輯

喜 谷 六 花

山の空ゆるいうき雲山枯木の姿ながら
 行くに野のあなたは或は丘の上になり雪の嶺那須山
 麥踏む横あるき娘筒袖の腕を組む
 草麥に肥ひく父も祖父も手洗ふたこの流
 猫柳參差その光を浴びんとす山羊
 こゝに來て佇ち稍久うす河の廣さ櫛の春邊
 遅日もちの實に來るのでけたまし鶴が音

秋 山 秋 紅 蓼

蒼く晴れきつた富士が戦つてゐる空
 あめがしづかに土のうへにふる春
 あめふるはるを木の枝がゆれ
 朝々白い梅我が家の朝を早く
 枝が僅かに夕日してゐる梅
 花のあかつきの爆音に出でてゆく
 兵隊さん日曜の櫻三分九段坂ほとり

内 島 北 琅

麥踏み 麥踏み 雪山 眞白
 萬歳の聲が遠くにわが青い麥踏む
 麥踏み終り粉雪のわが麥はたけ
 何もかも雪の下の牛鳴いてゐる

雪ふかく家の中牛に子が居て
 まだまだ春は雪の下神のお札白く
 櫛に子が乗つて雪道柿の枝の雪

内 田 南 州

春はなだれて來る山々さみどり
 朝だ光だみどりを透いて旭の來る
 芽、芽、櫛の芽、白、い、太、陽
 國戰ふ地に萌ゆるもの蓬いちめん
 春はいづちに戦ふ軍事便とだえる

靖國神社臨時大祭二句

英靈神鎮る花白きこの夜
 盡忠幾そたび花とうたへば命さやけし

林 雀 背

にちちち奮闘東條さん胸に滅燈下墨をする
 征つちまつた學徒一人一人を眼に菊を挿す
 勤勞の姉妹前後してかへる夕陽のつはぶきの花
 犬も訓練にちにちを柿落ちさう熟し
 草枯れんとす壕堤まだ野菊が一輪
 こわれてもこわれても子供模型機つくるひ
 新穀一つぶ一つぶ味はふ朝の卓へ日輪

細 谷 不 句

魚を提げ沼から來る男が冠りもの
 峠に立つ碧梧桐翁を思ふ帶廣のそば粉
 麥田がずつと乾いて柿冬木の肌
 追肥をする掘る霜ばしら下掘下げ

野のそら雲の無いいちにち麥を祈り人々
北方の盾思ふてる残雪すこしある一つ石
綱網やぶれた口つぐんだおやぢ漁夫ら

安齋櫻 碗子

霧の中畦青む國われら護るべし
土が濕り國策のヒマ崩ゆるこの時
鹽を頒つ村人にまどに大いなる燒け山
無風枯草ぼうとある畦こゝに火を放ち
遅日或は投げるやう水田の上飛んでゆく鷺
うらゝかさ漕ぐ釣舟に波を切る細い舳先
尾長尾のはつきりと居る夜明けくる春の木の間

古林巴 水樓

暮れ遅い日が松の枝にあるので寺の屋根
白梅の日の暮れるのを待つ
まだ霜除けはしたままの月影のさし
まだ霜のおりる日もあつて朝の畑の近い山遠い山
春になる雨の木の下
日曜日句會花曇りの傘はもつてゆく
蟲が身體でないてゐる月夜

朝倉九 鶴子

うつつ仙臺更けをひたく列車無暖房(北海道へ)
裸島とや景雪あした紺汐に浮く、
まさしく銅鑼針路函館へ海に饑えるし吾
馬橋まかせと雪野が暮れる方位も知らに
吹雪くば座仕事に集る爐火も旺ンなる

阿寒ぼつりそのみの空と雪野と木々

松宮 寒骨

空の雲より梅の花白く咲きたり
梅の花白く山がかり兵二三人居る
斷乎疎開す松うつくしい春日
春の空深くそこを走り去る戦車
少年旗をふり對す冬川をへだて
渚の松の雪見えてゐる串柿たべる
大業を思ふ雪の山みるみる山赤焼ける

渡邊 砂吐流

征くといふに芽麥に雪のちらつく日會ひにゆく
梅はまだ蕾を背景に國旗たすきに掛けた君を中
海濱倉庫のうづ高い貨物の間隙が寒く波立つてゐる
春三月釋の空へ芽ぶき立つ枝、合格してくる
紅梅らしく畑のずつと向ふの家もう寒くない雨で
咲いた梅に三日月が小早に戸を入れてゐる
雪が積つた幼稚園の屋根から煙が出てゐる

杉山 田庭

筍日日伸びゆく我等戦意亦鋭し
肉太に書ける萬年筆を撰び此鬪魂
大雪崩のあとの落ちつかぬ氣分で(悼花臥衣君)
句佛上人一周忌へ

鳥は雲に入りて國土薄霞ある
空へつゞく雲雀に思ひ馳せたまふか(悼音羽侯)
炬燵に凭り背筋が冷ゆる建て合せの悪い襖で

風窓を打つ襟を合し前線の訴ふる聲を聞け

妹尾 美雄

小松葉に寒明けけるそのやう掘り上げし壕の土
 淺春こゝに籠る覺悟年老いし母と
 芹を芹なきを見てあるく風ふく田畦
 野蒜をとることに長じうちの息子どち
 梅匂ふに來て椎の木の下に踞み
 印度を印度進撃を想ふ春寒き路上
 ずつと遠く來て野蒜をとり野蒜を揃へる

奥村 四絃人

赭顔白い襟ずうつと遺族花吹雪まとも
 軍靴が歌がゆらがして夕暮の餘花の並木
 月あかりにものを播く餘花ひらひらと黒い土
 庭ひろひ歩く播いたものの芽戦力になひ
 蔓も蛇も食ふとして若葉へ雲のやう紫煙吐く
 廿日大根眞心ほの見せわたしを迎へる
 横穴 あまた赤土堆う葉櫻山

大越 吾亦紅

濁へ夕日が家のよこ子ども三人眺める
 雲のうらにまるい日がある曇一日或時
 われら子どもとゆくみちの霜かくて霜どけ
 鐵の火花が散つて雪の積りゆく
 月をふる雪かかり外套に手を入れて行く
 重い雪ふり朝日がまちの山に松の木
 何んとなく町の上み下も眺め凍のゆるみ

皇大神宮參拜

荻原井泉水

みたらし川はけふ山の春雨の水をふかみ
 杉の雫する傘は雫せぬほどを置く
 おん杉のおくこのおそざくらちりもはじめず
 晴れまのたしかに晴れてゆく雲のうぐひす
 風呂を出たゆかたきて白鷺のとぶはとぶは
 志摩をすぎると又伊勢の花のちる麥畑
 額には碧梧桐が酔つてゐる海音暮れると蛙

中塚 一碧樓

たんぽゝ花咲くみち松下村塾へ
 薪あり椿の木白い花あり
 いつからか葱坊主が出來てゐるさやうなる事々
 生死もとよりなきごとし辛夷咲きたり
 人が來る姿寒さゆるみし野道
 四月雲寒く山を越え行かむ人々
 家の奥の方からも見える竹の秋の丘

西垣 卍禪子

征つて一年あゝしたかうしたともいふて麥の青い
 寫眞の小さきにお前と婆とがをる床のかきつばた
 かげ膳を置くそら豆のおはぐるこん夜薄着せる
 麥穗が立つ夜を明るくて人の通る
 包をみながかたはらに置いて日曜のラッパが流れる(營舎へ面會)
 葉櫻をみるのみけふ南方へ便りするといふ父
 螢ながれ光り向ふに人のゐるて

戦線及入營の諸氏の投稿に限り軍事郵便はがきにて差支なし

編輯後記

●俳句雑誌の統合が要請される所以は、無意味な競争を排除すること、決戦時下に於ける國家的機關としての任務をはたす事にあります。それが、舊來の割據主義的、黨派主義的な考へから、非定型俳句人の總蹶起運動の開展をばむ様な事があつてはなりません。

●戦は武力戦であると共に思想戦でもあります。それ故に、俳壇に於いても思想の方面に必勝施策を確立せなければなりません。これが根源は、何よりも先づ國體に基づき、國體を顯現し、國體に則り、肇國の眞の精神を奉體し、皇運を扶翼すべく滅私敢闘せなければならぬ所にあります。新俳句は今や日本の開展と共に在るといふことを銘記致しませう。

●大變な思ひで創刊號を出すことが出来まして嬉しい限りであります。本號は舊層雲、海紅、陸各社の手元の原稿を廻してもらひ、早急に纏めましたために、思ひ通りの編輯は出来ませんでした。これは號を追つて取り返すとして、何に置いても第一にお願ひ致したいことは、今こそ國家が決戦時であるのだから、從來の行きがかりなどに捉はれることなく、名實共に非定型俳壇唯一の俳句道場として本誌を育てて行かなければなりません。我々は一致團結、俳壇總蹶起、新俳句國民運動の推進に一層の御協力あらんことを切望するものであります。(出禪子)

○消息

- 鳥田秀整(英一)氏(丸龜)病歿。
- 杉本昱誓氏(静岡)三月十日逝去。
- 城島舟禮氏(新京)三月二十八日病歿。
- 佐藤風年氏(新潟)四月三日逝去。
- 高橋良滋氏(名古屋)四月十七日病歿。

投稿略規

- 一、層雲 壇 萩原井泉水選
- 一、海紅句錄(近作抄共) 中塚一碧樓選
- 一、陸 集 西垣出禪子選
- 宛先、足立區伊興町狹間八八七
- 句數十五句以内、楷書にて清記、居所氏名を詳記のこと。
- 句稿は右三氏のうち一人に宛て直接その住所へ送稿されたし、一人一ヶ月一稿一選者に限ること。
- 一、メ切 毎月一日
- 一、句稿以外の投稿は本誌發行所宛。但し、當分の間舊各誌の發行社宛に送稿されたし。陸社は舊「新日本俳句」「多羅葉樹下」「白塔」「北斗」の四社へ。
- 一、購讀誌代の拂込は従前通り舊各誌の發行所宛に願ひます。但、新購讀者に限り必ず「新」と明記して「俳句日本」社へ送金せられたし。

本誌定價

- 一冊分——金七十錢 (送料二錢)
- 六冊分——金四圓二十錢 (送料一冊二錢)
- 十二冊分——金八圓四十錢 (同)
- ・前金(なるべく振替)で御拂込下さい。
- ・必ず何月號よりと御指定の事。
- ・御轉居の際は發送部宛御報下さい。

第一卷 第一號

昭和十九年五月廿五日 印刷納本
昭和十九年六月一日 發行

發行人 中塚直三
編輯人 西垣隆滿
印刷人 檜山公一
印刷所 株式會社 常磐印刷所 東京一三六

發行所 東京都世田谷區松原町一ノ八三
俳句日本社
振替東京八〇二三番
日本出版會 一五〇〇四
會員番號

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

みいくさ集

戦列につづくおもひ製繩機踏みつゝ
 擬装をとく枯草がにほひがする軀
 戦機いま雪ふる空へつきすゝむきもち
 冬日暮れるわれ一日それとるる旋盤を拭く
 一兵とらし莞爾粉雪吹く
 敵愾はだら雪地に白きを戻り
 航母出航して了つて海の間が抜ける
 家々日の丸に輝いて赤道下の正月
 友よいづこ君の便りをランプ赤々受ける
 戦ひの場のふとみなが星の流れ
 戦場に作業す明けのそんな顔もしとらぬ兵隊
 タベお米一粒ときこぼすまい霰こぼしてゆく雲
 空に芽ぶくことは云はず増産日々働く
 雪の中から戦争へ出てゆく木を曳いてゆく
 ははそばにも盃とらし征くといふつらだましひ
 大に菜つ葉作らう雪から畑が出だした
 武士道は死ぬことと君は征くけふ牡丹雪ふり

松原 楓々
 石川 鋭雄
 岡川 涓二
 吉川 金次
 足達 短水
 高橋 晩甘
 赤星 竹嶺
 高木 四郎
 深澤 夜舟
 武藤 大眞
 西垣 碧禪洞
 鈴木 折嶺
 北田 千秋子
 關口 江畔
 和田 光利
 高橋 良太郎
 木戸 夢郎